

未来へつなぐ

東日本災害ボランティア
第2次福岡大学派遣隊



目 次

○活動報告書を発刊するにあたって	責任者（学生部長）小野寺 一 浩	1
○酷暑の中での達成感	隊長（理学部学生部委員）山 口 武 夫	2
1 第2次派遣隊の活動概要と参加者名簿		3
2 募集から活動報告まで		8
3 被災地での活動内容		12
1. 上山八幡宮 訪問		12
2. 体力班		13
3. 子供班		15
4. 高齢者班		16
5. レンガ（土ブロック）班		17
6. 南三陸町町長表敬訪問		18
4 派遣隊員レポート		19
1. 学生レポート		20
2. 引率者レポート		62
5 活動でお世話になった方々からのメッセージ		65
6 未来へつなぐ		69
7 学内募金活動報告		72
○第2次派遣隊にご支援ご協力いただいた方々		
○謝辞		

活動報告書を発刊するにあたって

責任者（学生部長） 小野寺 一 浩

本学では昨年に引き続き、8月20日から24日まで4泊5日の日程で、学生102名、教職員10名、計112名からなる東日本災害ボランティア「第2次福岡大学派遣隊」を宮城県南三陸町と気仙沼市に派遣しました。

早いもので、あの未曾有の大震災から約2年が経過しようとしています。世間の震災への関心が薄れつつある中、今回の派遣隊員の募集には昨年度をはるかに超える300名余りの応募がありました。福大生の被災地に対する熱い思いに心を打たれるとともに、このような学生が数多くいるということに福岡大学の明るい未来を感じています。

そのような中から選ばれた第2次派遣隊員は、6回にわたる事前研修等を経て、仮設住宅の方々や学童保育の小学生達とのふれあい交流をはじめ、がれき撤去、海岸清掃、建材用のブロック（日干しレンガ）づくりといった様々な活動を被災地で行いました。

時間がたつにつれ、被災地のニーズは刻々と変化していますが、隊員達は現地のボランティアセンター等の方々と密に連絡を取り、できる限りのことを精一杯活動させていただきました。

詳細は学生の報告に譲りますが、現地のボランティアセンターをはじめ、関わった多くの方々から感謝の言葉を頂戴しております。

また、今回の派遣についてもテレビ・新聞等のメディアで伝えられ、社会に対して福岡大学の取り組みが広く周知されるとともに、東北から遠く離れたこの九州の地に住む方々にも、今一度、被災地に思いをはせる機会となったのではないかと思います。

本報告書では、学生自身の言葉でその成果を報告していますので、ぜひご覧ください。

最後に、今回の派遣に際し、現地のボランティアセンターの方々をはじめとした関係者の皆様にはご理解、ご支援いただきありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

酷暑の中での達成感

隊長（理学部学生部委員） 山口 武夫

あの東日本大震災の日から1年半が過ぎた平成24年8月20日、東日本災害ボランティア第2次福岡大学派遣隊員112名は宮城県南三陸町に到着した。第1次福岡大学派遣隊が活動した昨年の8月と比べると、当時散在していたがれきは数か所に山積みされていて、住宅跡地には夏草が茂っていた。隊員にとって、百聞は一見に如かずで、目の前に展開する光景は今回の酷暑の中でのボランティア活動とともに、一生忘れることのできない体験であったと察します。

今回は住宅跡地のがれき撤去などの体力系の活動に加えて、仮設住宅に住んでおられる高齢者の方との交流会やうちわ作り、また低学年対象の学童保育などのプログラム系の活動も行いました。事前研修は『ボランティア活動の心得』を身につけるのに、また猛暑の中での学外清掃や救急救命講習会は『酷暑』対策にそれぞれ有効であったと思います。被災地の復興に向けて、隊員同士が学部、学科、学年の壁を越えて交流し、一致団結してボランティア活動を立派に成し遂げたことは、貴重な体験として一生の思い出になると信じています。隊員の皆様一人一人がこの貴重な体験を周囲の人々に伝えるとともに、今後の人生に活かされることを切に希望いたします。

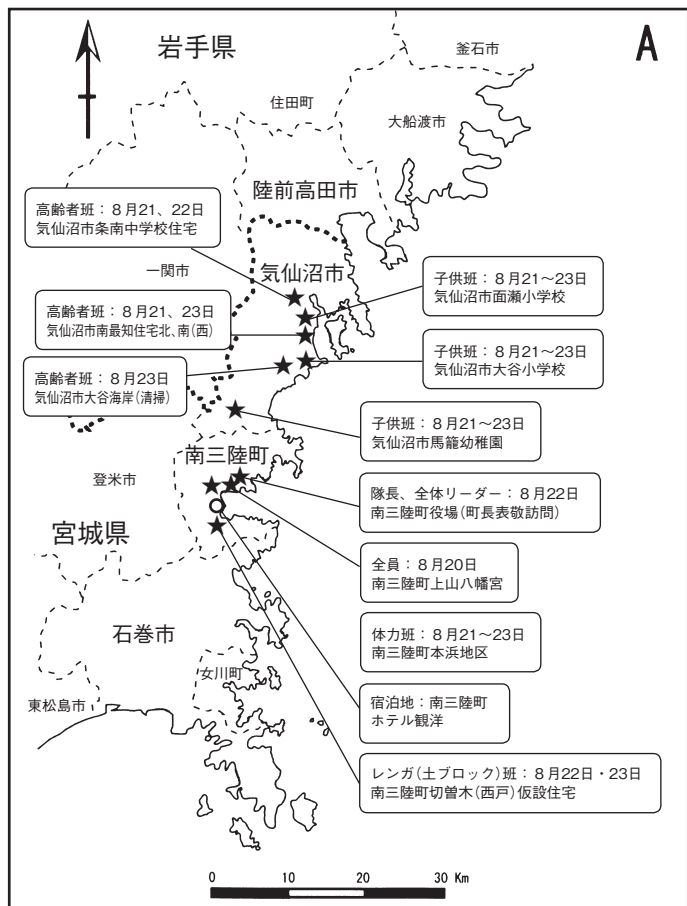
最後になりましたが、活動計画を立案する際には、第1次福岡大学派遣隊の活動記録を大いに参考にさせていただきました。また、今回のボランティア活動は福岡大学の経済的な支援やいろいろな人の協力のもとに行うことができました。ここに、関係者の皆様に、敬意を表すとともに、深く御礼申し上げます。

1 第2次派遣隊の活動概要と参加者名簿

1. 概要

- 派遣期間 2012年8月20日(月)～8月24日(金)
- 派遣人員 総勢112名(学生102名、教職員10名)
- 派遣先 宮城県 南三陸町・気仙沼市
- 主な活動内容
- ・がれき撤去作業
 - ・仮設住宅の清掃および住民の方々との交流
 - ・学童保育の小学生との交流・学習支援
 - ・海岸清掃活動
 - ・復興資材用の土ブロック(日干しレンガ)づくり
 - ・上山八幡宮参拝および宮司による講話、被災体験の紙芝居の講演
 - ・南三陸町町長表敬訪問

2. 活動場所



3. 活動行程

(1) 全体行程

東日本災害ボランティア「第2次福岡大学派遣遺隊」行程表

- ・派遣期間：平成24年8月20日（月）～24日（金）5日間、うち活動期間3日間
- ・出発日：8月20日（月）10:00福岡空港第1ターミナル集合 10:30出発式 / 11:55発 ANA797便 ⇒ 13:40 仙台空港着 / 14:40 貸切バス3台で出発
⇒ 15:30 プログラム系用の買い出し ⇒ 17:00 上山八幡宮着 宮司さんのお話等 ⇒ 19:00 ホテル着
- ・帰福日：8月24日（金）10:00ホテル発 ⇒ 12:00 仙台空港着 / 14:20発 ANA798便 ⇒ 16:20 福岡空港着
- ・宿泊場所：南三陸ホテル観洋
- ・派遣人員：112名 内訳：学生102名（男45名、女57名）、引率者10名（教員4名、事務職員5名、看護職員1名）

バス	受入れボランティアセンター	8 / 20 (月)	8 / 21 (火)	8 / 22 (水)	8 / 23 (木)	8 / 24 (金)
①号車	南三陸町 災害ボランティアセンター	仙台空港→ホテル観洋 A・B・C班 +J班4名	【体力系】 学生：40名 (A・B・C・D班) 引率者：2名 (篠崎、岩永) 計42名			ホテル観洋→仙台空港 A・B・C班 +J班4名
②号車		仙台空港→ホテル観洋 D・E・F班 +J班3名	【体力系】 学生：21名 (E・G・H・班でプログラム系(子供向け)にその日に行かないメンバー) 引率者：2名 (田中、兼岡) 計23名			ホテル観洋→仙台空港 D・E・F班 +J班3名
③号車	気仙沼市社会福祉協議会 ボランティアセンター	仙台空港→ホテル観洋 G・H・I班 +J班3名	【プログラム系 (高齢者向け)】 ※23日(木)に一部体力系あり。 学生：21名 (F・J班) 引率者：2名 (古賀(隆)、田代) 計23名	【プログラム系 (子供向け)】 ※日替わりで気仙沼学童保育との交流と南三陸町体力系ボランティア を行う 学生：21名 (E・G・H・班でプログラム系(子供向け)にその日に行くメンバー) 引率者：4名 (山口、兼岡、古賀(龍)、西村、*上原) 計25名 *上原：取材活動の為移動あり		ホテル観洋→仙台空港 G・H・I班 +J班3名

※引率者の行き帰りの号車は21～23日と同じ

(2) プログラム系活動行程

東日本災害ボランティア「第2次福岡大学派遣隊」プログラム系スケジュール

3号車	8月21日(火)		8月22日(水)		8月23日(木)	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後
(高齢者向け) (学生) F・J班 21名 (引率) 古賀(隆) 田代 2名 計23名	時間：集合9時30分 10時～11時30分 場所：南最知住宅北 内容：うちわ作り 人数：6名 引率：古賀(隆)	・復興市場見学 ・打ち上げられた船の見学 ※ともに気仙沼市内	集合：9時30分 時間：10時～11時30分 場所：条南中学校住宅 内容：交流会 お茶会、福岡の文化を紹介 人数：21名 引率：古賀(隆)、田代	・奇跡の一本松見学 ※陸前高田市 ・面瀬小学校にて草取り 作業と子供達との交流 ※気仙沼市内	待機	時間：集合13時00分 13時30分～15時 場所：南最知住宅南(西) 内容：うちわ作り 人数：6名 リーダー：中野(J班) 引率：なし
	時間：集合9時00分 9時30分～11時30分 場所：条南中学校住宅 内容：清掃作業(拭き掃除) 人数：15名 引率：田代				【体力系ボランティア】 場所：気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンターに集合 ※作業現場にはボランティアの車で移動 時間：集合8時30分、作業9時～15時 内容：海岸清掃 引率：古賀(隆)、田代 人数：15名 午後16時から面瀬小学校にて 子供達との交流。 ※23人全員	
(子供向け) (学生) E・G・H・I班 21名 (引率) 山口 古賀(龍) 西村 上原 4名 計25名	時間：9時～17時 場所：面瀬小学校区学童保育なかよしハウス 内容：交流、学習支援 人数：15名 引率：古賀(龍)		時間：9時～17時 場所：面瀬小学校区学童保育なかよしハウス 内容：交流、学習支援 人数：15名 引率：古賀(龍)		時間：9時～17時 場所：面瀬小学校区学童保育なかよしハウス 内容：交流、学習支援 人数：15名 引率：古賀(龍)	
	時間：10時00分～17時30分 場所：大谷公民館(大谷小学校区学童保育みつぱちクラブ) 内容：交流、学習支援 人数：4名 引率：山口		時間：10時00分～17時30分 場所：大谷公民館(大谷小学校区学童保育みつぱちクラブ) 内容：交流、学習支援 人数：4名 引率：山口		時間：10時00分～17時30分 場所：大谷公民館(大谷小学校区学童保育みつぱちクラブ) 内容：交流、学習支援 人数：4名 引率：兼岡	
	時間：9時～18時 場所：馬籠幼稚園(馬籠小学校区学童保育パンダクラブ) 内容：交流、学習支援 人数：2名 引率：西村		時間：9時～18時 場所：馬籠幼稚園(馬籠小学校区学童保育パンダクラブ) 内容：交流、学習支援 人数：2名 引率：西村		時間：9時～18時 場所：馬籠幼稚園(馬籠小学校区学童保育パンダクラブ) 内容：交流、学習支援 人数：2名 引率：西村	
土ブロック造りと 住民の方々との 交流			時間：9時～18時 場所：切替木(西戸)仮設住宅 内容：復興資材用の土ブロックの作成および住民の方々との交流 人数：5名 リーダー：松枝(B班)		時間：9時～18時 場所：切替木(西戸)仮設住宅 内容：復興資材用の土ブロックの作成および住民の方々との交流 人数：6名 リーダー：松枝(B班)	

4. 参加者名簿

(1) 学生内訳 (学部・学年・男女別)

【学生】102名

学部	学年	大学院		6年		5年		4年		3年		2年		1年		合計					
		男	女	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
人文		0	1	0	0	0	0	2	3	5	2	4	2	2	4	2	3	5	8	13	21
法		0	0	0	0	0	0	1	1	2	3	2	3	5	1	1	2	2	7	8	15
経済		0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	2	2	3	5	1	1	2	5	7	12
商		0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	4	3	4	7	0	1	1	6	7	13
商二部		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	1	2	3
理		0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	6	1	1	2	0	1	1	5	4	9
工		0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	2	3	1	4	1	1	2	7	2	9
医		0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	4	0	1	1	1	3	4	1	9	10
薬		0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1	2	2	4	6
スポーツ科		0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	1	0	1	0	0	0	3	1	4
合計		0	1	1	1	2	0	0	6	12	17	38	14	16	30	7	12	19	45	57	102

(2) 学生名簿

Aグループ 体力班

学部	氏名	
EI	乾 旭秀	◎
CF	坂西 結	○
JJ	合力 佳奈	
CC	梅田保奈美	
SC	岡嶋 静香	
TA	中山 泰輔	
TA	高野 裕衣	
TM	吉富 大輔	
PP	植木 哲	
GS	穴井 稔也	

Bグループ 体力班

学部	氏名	
BB	原口 茜	◎
CC	竹内清太郎	○
JJ	吉田 智彦	
JJ	三小田有希	
EE	門根 彩乃	
EI	土岐 多聞	
CB	蔣 明樹	☆
SE	松枝 美華	☆
SE	田熊 公尊	
TC	森廣 大地	
TE	砥綿 倭平	

Cグループ 体力班

学部	氏名	
TA	原田 大輔	◎
JB	原田加奈子	○
JJ	本村麻菜美	★
JJ	前田光太郎	
EE	足立 花奈	
EE	安河内駿平	
EI	是松 佳奈	
CF	堀 享輔	
PP	橋口麻依子	

Dグループ 体力班

学部	氏名	
PP	市川 泰子	◎
LH	熊谷 海	○
JB	後藤 祐樹	
EE	大坪 彩音	
CF	川原 璃夏	
CF	村岡 璃子	
BB	山崎 健史	
SC	大蔵 一聡	
SE	山口 晋平	
TL	坂井 茉凜	

Eグループ 子供班

学部	氏名	
CB	矢野 雅貴	◎
LC	小倉 望未	○
LF	宮本 美歌	
JJ	原 悠理	
CF	進藤美沙紀	
BB	永野 璃	
TC	熊手 朋稀	
GH	古野 知滉	
GS	三好 耕太	
GS	大川内文哉	

Fグループ 高齢者班

学部	氏名	
LP	岩崎 有也	◎
CF	小倉 一馬	○
LD	若杉 智子	
LA	太田 実郷	
LC	信岡 陽香	
LP	上野 紗季	☆
EI	山川 毅	
MM	西村 瑠美	
MN	真島 慶子	
MN	佐藤 美晏	
PP	藏本 彩加	

Gグループ 子供班

学部	氏名	
PP	古嶋 研史	◎
LC	糸濱 正晶	○
LE	河野亜紀子	
LF	大原加代子	
JB	浜脇 慶成	
JB	山口志保美	
EE	三角 梨奈	
SP	谷口亜沙美	
TE	久保田慶幸	
MN	倉元 志穂	
MN	藤井 早紀	

Hグループ 子供班

学部	氏名	
EE	久保 敦子	◎
LH	橋目 雄太	○
LH	椎葉 風太	
JB	横尾 智美	
JJ	東丸 卓矢	
JJ	東郷 瑛	
CB	藤田 大揮	
SP	小川 航平	
PP	畠中マリ亜	

Iグループ 子供班

学部	氏名	
JJ	尾関 直人	◎
LC	津崎 勇輔	○
LF	福島瑠美子	
LG	入口 真依	
LP	芦澤 真美	
LP	長岡 知宏	
JJ	安田 史恵	
EI	小林 拓海	★
SM	坂元翔太郎	
MN	牟田千恵美	
MN	右田 尚子	

Jグループ 高齢者班

学部	氏名	
CB	中野加奈子	◎
LC	永石 康平	○
LE	小豆野愛理	
LH	三小田理恵	
EI	宗安沙弥佳	
CF	太田 夕貴	
SE	江藤ちなみ	
MM	小田 直樹	
MN	岳尾 亜耶	
MN	本山 陽菜	



※★は全体リーダー、☆は全体サブリーダー、
◎はグループリーダー、○はグループサブリーダー





(3) 引率者名簿

氏名	所属
山口 武夫	隊長、理学部化学科教授
兼岡 秀俊	医学部看護学科教授
岩永 和代	医学部看護学科講師
田中 英彦	理学部化学科併任講師
篠崎 博	学生課長
古賀 龍	学生課員
上原 洋平	広報課員
西村 愛子	言語教育研究センター事務室員
古賀 隆次	福岡大学病院医事課員
田代美由紀	福岡大学筑紫病院看護師

2

募集から活動報告まで

<p>4月16日 ～5月10日</p>	<p>募集期間</p>	<p>東日本大震災から1年が過ぎたが、「昨年に引き続き今年も福岡大学の派遣隊としてボランティアに参加したい」という学生の声が多く、今回の募集が実施された。</p> <p>今回の募集では、前回の被災地の清掃やがれき撤去の活動に加え、学校や仮設住宅でのスポーツや文化活動、心のケアが目的として挙げられた。</p>
<p>5月17日</p>	<p>派遣隊員の選考結果発表</p>	<p>学生課前の掲示板に、派遣隊員が発表された。</p> <p>定員50人程度の募集に対し、約300名の応募があった。その中から、105名の学生が選出され、第2次福岡大学派遣隊が結成された。</p>
<p>6月6日</p>	<p>第1回事前研修</p> 	<p>現地での活動の前に、全6回の事前研修が実施される。</p> <p>その第1回として、小野寺学生部長や山口派遣隊長の挨拶、第1次派遣隊参加者である土橋亮太君からの講話、今後のスケジュールやボランティア保険の説明の後、グループワークとして被災地の現状を把握する方法を話し合った。</p> <p>そして、次回の事前研修時までには、各グループで被災地の現状を把握する方法をまとめてくることになった。</p>
<p>6月19日</p>	<p>第2回事前研修</p> 	<p>ボランティアに関して知識が少ない学生が多いことから、ボランティア団体「チーム夢」の代表である吉水恵介さんにお越しいただき、ボランティアの心得や吉水さん自身の体験などを話していただいた。この講話により派遣隊員の意識が高まった。</p> <p>その後、各グループで調べてきた被災地の現状把握の発表に移った。この発表では、それぞれが持っていた情報を共有することにより、派遣隊員全員が被災地の状況をより理解することができた。</p> <p>そして、次の研修に向けて「何ができるか、したいか」についてグループワークを行った。</p>
<p>7月3日</p>	<p>第3回事前研修</p> 	<p>3回目の研修では、具体的に体力系では何ができるか、心のケアとしては何ができるのかをグループで発表し、自分達ができることを明確にしていた。前回までは毎回グループを入れ替えていたが、この発表をもとに、それぞれがしたい活動に応じたグループ分けを行った。また、全体のリーダーやサブリーダーを決め、スローガンとして「未来へつなぐ」を掲げた。このスローガンには東日本大震災を風化させたくないという思いや、復興地の方々と一緒に去年は見えていなかった"未来"に向けて活動していきたいという思いが込められている。</p>

<p>7月14日</p>	<p>結団式・懇親会</p>  	<p>私達派遣隊員にとって、結団式は初めての公式の場であり、全員が福岡大学のTシャツを着て整列することで、派遣隊員としての実感が強く湧いた。また、学長や学生部長からの激励や、全体リーダーの決意表明を受け、東北での活動意欲が高まった。</p> <p>その後、場所を移して懇親会を開催し、派遣隊員同士の交流を深めることができた。</p>
<p>7月18日</p>	<p>第4回事前研修</p> 	<p>4回目の研修では、第1次派遣隊隊長の杵山先生に講話をしていただいた。実際に現地に行かれた杵山先生の話は、自分達の目で現地を見たことがない私達にとって、大変参考になるものだった。</p> <p>その後、グループ毎に現地でのどのような活動をしたいか、そのためにはどのボランティアセンターや団体の協力が必要なのかを発表した。この発表をもとに、リーダー会議を開き、実現可能な受け入れ先を探した。</p>
<p>7月20～ 23日、 8月1日</p>	<p>学内募金活動</p>  	<p>福岡の地で何かできることはないだろうかという派遣隊員の声から、学内募金活動を行った。</p> <p>授業開始前と昼休みの時間帯を中心に、学生や教職員に募金の協力を呼びかけた。</p> <p>その結果、多くの方からの募金が集まり実りある活動となった。</p> <p>目的：現地ボランティアセンターへの寄付 期間：7月20日（金）、21日（土）、23日（月）、 8月1日（水） 場所：学生課前、正門、オアシス周辺、中央図書館前</p>

<p>8月3日</p>	<p>第5回事前研修</p>   	<p>5回目の研修では、午前中に人文学部教育・臨床心理学科の林幹男教授から災害ボランティアとしての基礎知識の講話を受けた。講話では、被災者の心理的経過やボランティアの活動意義などを学び、2週間後に迫った現地での活動に対するビジョンが明確になった。</p> <p>午後からは学外清掃を行い、グループ毎に福岡大学の周辺の清掃活動に取り組んだ。</p> <p>猛暑の中、実際に外で活動することは想像以上に体力を消耗するものであり、現地で活動するための、意味ある事前研修となった。</p>
<p>8月7日</p>	<p>ハンドマッサージ練習、救急救命講習</p> 	<p>現地での心のケアの一つとして、ハンドマッサージをしながら現地の方達と会話をするというのがある。そのために、派遣隊員同士でハンドマッサージの練習を行った。リーダーを中心にインターネットや本でハンドマッサージについて調べ、実際にやってみることで、ハンドマッサージをしながらだとコミュニケーションがとりやすいことが確認できた。</p> <p>その後、第一記念会堂剣道場で救急救命講習が行われた。福岡市民防災センターの方からご指導いただき、また福岡大学医学部看護学科の学生メンバーの応急手当普及サークル「eggs」の皆さんにもサポートしていただいた。</p>
<p>8月17日</p>	<p>第6回事前研修</p>	<p>最後の事前研修では、リーダーを中心に作ったハンドブックを配布し、派遣期間中の5日間の詳しいスケジュールや持ち物、注意事項を確認した。</p> <p>その後、班ごとにミーティングを行い、各班で活動に必要な準備や持ち物について話し合った。</p>

<p>8月20～ 24日</p>	<p>被災地での活動</p> 	<p>活動初日は、昨年度、第1次派遣隊ががれき撤去作業を行った宮城県南三陸町の上山八幡宮を訪れ、参拝させていただいた。宮司さんのお話を聞かせていただいた後、宮司さんの娘さんである工藤真弓さんに震災の紙芝居を読み聞かせていただいた。この紙芝居は工藤真弓さんが実際に体験した3月11日を元に作られたものである。</p> <p>昨年同様、南三陸ホテル観洋を宿泊場所として、二日目以降は活動場所や内容に応じて3台のバスに分乗し、南三陸町、気仙沼市で活動を行った。</p> <p>8月22日に、初日に訪問した上山八幡宮の宮司さんの紹介で、南三陸町の佐藤仁町長に、山口隊長、古賀学生課員、全体リーダーの本村・小林の4名で表敬訪問した。24日に全員無事に帰福した。</p> <p>被災地での活動内容については、③被災地での活動内容と④派遣隊隊員レポートで報告する。</p>
<p>10月24日</p>	<p>活動報告会 (831教室)</p>  	<p>事前研修から被災地での活動、帰福までのビデオを放映後、学生から活動内容別に活動報告や感想を発表した。また、学生代表から募金活動報告及び義援金の寄付報告を行った。最後に、衛藤卓也学長より、派遣隊に対しての労いの言葉をいただき報告会を閉会した。</p> <p>会場内には、現地でのボランティア活動の写真や上山八幡宮で読み聞かせをしていただいた紙芝居と同じ絵本の展示を行った。報告会には学生、教職員らが出席した。またテレビ局の取材もあり、活動内容を多くの人に伝えることができた。この報告会が福岡大学第2次派遣隊のスローガンである「未来へつなぐ」の新たな第一歩の活動となった。</p>

3 被災地での活動内容

1. 上山八幡宮 訪問

8月20日、宮城県に到着した私達はまず南三陸町の上山八幡宮を訪問した。この上山八幡宮は、昨年の福岡大学第1次派遣隊から繋がりがあがる。第1次派遣隊は活動最終日の早朝に上山八幡宮を訪れ、全員でがれきの撤去作業を行った。当時は、津波の震災被害からほとんど手が付けられていない状況であったようだ。

私達は、上山八幡宮で黙祷をささげ、宮司さんから被災したときのお話を聞かせていただいた。比較的高台にある上山八幡宮であったが、それでも津波は押し寄せてきて、甚大な被害を受けたという。

また、工藤宮司のご息女、工藤真弓さんは、この震災を紙芝居で伝えていく活動を行っており、私達に紙芝居を読み聞かせてくれた。その紙芝居には、実際に真弓さんが体験した2011年3月11日が描かれていた。新聞や映像からは伝わらない多くのことを、真弓さんの絵と言葉が伝えてくれた。

派遣期間中の最初の活動で、現地の方の生の声を聞くことができたのは、その後の活動意欲に勢いをつけるものとなった。

とても貴重なお話を聞かせていただいた上山八幡宮の方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。



2. 体力班

私達は活動3日間を通して、南三陸町本浜地区のがれき撤去作業を行った。活動場所の近くには震災の津波の時に、職員の方が最後まで住民の避難を呼びかけた防災対策庁舎の骨組みなどが残されていた。

活動1日目、宿泊先をバスで出発した私達は、まず南三陸町災害ボランティアセンターに向かい、その日の活動内容を指示される。ここでは、私達のほかにも関東や関西といった遠方から来た団体が多くいることを知った。また、ここで活動するメンバーひとり一人に黄緑色のビブスを渡される。活動場所には、ほかの団体や個人の方もボランティアに来ているため、名前を書いたシールを張って作業をすることになる。

活動内容は重機を使うことができない小さながれきの撤去・分別作業である。

活動場所に着き、ボランティアセンターの方から、作業範囲・がれきの分別について説明を受ける。同じように見えるがれきでも、リサイクルできるものとリサイクルできないものがある。それを混ぜてしまうと、業者の買値が下がり、復興の資金になるお金が減ってしまうので、しっかりと分別をしなければならない。

活動終了後、ボランティアセンターの方から、震災前に活動場所に住んでいた方が時々手を合わせに来られていることを聞く。その際に黄緑色のビブスを付けたボランティアが元気に活動しているのを見て、現地の方も元気づけられるという。その言葉を聞いて、がれきを撤去するだけでなく、現地の方に元気を与えることを知る。

活動2日目と3日目はそこでの活動が初めてのメンバーだけ、がれきの分別作業についてボランティアセンターの方から説明を聞き、全員で活動を行った。また、活動3日目は側溝の泥出し作業も行った。

活動3日間を通して、天候がよく、強い日差しを受けながらの作業であった。メンバー達は30分から40分ごとにこまめな休憩を取りながら作業を行った。3日間で作業できた範囲は民家3軒分ほどであった。まだ、周りには手の施されていない状態が広がっており、復興にはどのくらいの時間がかかるのだろうかというメンバーは感じた。

活動3日目の活動終了後、ボランティアセンターの方に聞いた仮設の商店街「南三陸町さんさん商店街」へ向かう。商店街の方々は、住んでいた場所が津波で被害を受けた方達である。商店街を開くには、国や県の支援が受けられず自分達の力で頑張っていると聞き、こちらも頑張ろうと元気をもらった。



3. 子供班

私達は気仙沼市内にある面瀬小学校区学童保育なかよしハウス、大谷小学校学童保育みつばちクラブ、馬籠小学校学童保育パンダクラブの3カ所に分かれ、子供達との交流活動を8月21日～23日の3日間行った。

初日には、子供達は災害で落ち込んでいるのだろうとばかり思い、不安であった。しかし、東北から遠く離れた九州から来た私達を子供達は元気いっぱいに迎えてくれた。学童保育の手伝いをするという大まかな目的しかなく、何をすればいいかもよくわからない状況だったが、先生方のおかげで、班員それぞれがすぐに活動を自発的に開始できた。各施設とも主に勉強の手伝いや室内外で子供達と遊ぶなどの活動を通して交流を深めた。

2日目には子供達との距離は近づいており、前日より心を開いて話をしてくれたように感じた。

最終日、行く前は子供達に元気になってもらいたい、心のケアをしたいなどと思っていたが、元気いっぱいの子供達に圧倒されて、元気ももらったのは私達の方だと気付かされた。活動が終わり、お別れの挨拶をしてもなかなか子供達が離れず、帰りのバスが見えなくなるまで手を振って見送ってくれた姿を見て、涙を流す隊員も少なくなかった。

子供達の明るく元気な笑顔が被災した東北の元気の源になり、その若い力が、今後の東北の復興に必ず繋がっていくだろうと思う。



4. 高齢者班

私達は気仙沼市の南最知住宅北・南（西）、条南中学校住宅などの仮設住宅を訪問し、主にお年寄りの方と話をしながら掃除をする活動や交流会、うちわ作りを行った。

1日目は2班に別れて活動を行った。一方の班は条南中学校住宅で、ボランティアセンターの方と一緒に玄関や窓の拭き掃除を行った。中学校の校庭に建てられた仮設住宅だったので砂埃がすごく窓はとても汚れていた。仮設住宅はプレハブなので冬は寒く玄関と窓は二重になっていた。隣の家との境は壁一枚でありプライバシーがないと感じた。どこの仮設住宅に入るかは抽選で決まり、仮設住宅のなかで地域の輪があると聞いた。もう一方の班は南最知住宅北でうちわ作りをしながら交流を行った。

2日目は高齢者班全員で同じ条南中学校住宅に行き、集会所を借りて交流会を開催した。福岡のことを知ってもらおうと、「福岡大学、方言、どんたく、山笠、福岡の食」についてクイズを交えて紹介し、正解者の方にプレゼントを渡した。その後はそれぞれに話をしながら、事前研修で習得したハンドマッサージを行った。

3日目は再び2班に別れ、一方の班は南最知住宅南（西）を訪問し、うちわ作りを行った。「わざわざ福岡からありがとう。うちわにみんなのメッセージと名前を書いて」と言ってもらえて、私達が行った意味が少しはあったかなと思えた。もう一方の班はプログラム系活動のマッチングができなかったためボランティアセンターの依頼により大谷海岸で清掃活動を行った。

被災者の方と直接接する活動だったので、どんな言葉を使うべきかなどたくさんの不安があったが、みなさんは私達が思っていたよりも明るくて、私達にとっても優しくしてくださり、元気をあげたいと思っていた私達の方が、元気をもらった気がした。



5. レンガ（土ブロック）班

私たちは、一般社団法人南三陸町復興推進ネットワーク（以下、南三陸町復興推進ネットワーク）の方々から「土ブロックプロジェクト」への参加のお誘いをいただき、8月22日、23日の2日間プロジェクトのお手伝いを行った。このプロジェクトは津波で塩害を受けた土を用いてブロック（日干しレンガ）を作るもので、特別な技術を用いずに作ることができ、町民およびボランティアの協力のもと行われている。ブロックの用途は仮設住宅の倉庫の材料とのことだった。

作業内容は、ブロックの原料となる粘土を型に詰めて押し込んで固めて、後は自然乾燥させて完成となる。その作業を1日中行い、1日に約50個作った。作業内容は簡単であったが、力のいる部分があり、なかなか大変なものであった。しかし完成予想図を見せていただいて、自分の作った物が被災地の方々の役に立つと考えると作業の手は進んだ。

また、作業中や休憩時には南三陸町復興推進ネットワークの方々、切曾木（西戸）仮設住宅の住民の方々、同じくプロジェクトに参加していた慶應義塾大学の方々とお話をさせていただいた。その中で、南三陸町復興推進ネットワークの方からの「震災を利用して商売をしている人もいるから、すべての情報を鵜呑みにするのではなく、実際に現地に来て現地の方の思いを聞いて何かを感じてほしい。」というお話しはとても印象に残っている。他にもブロックを作りながら当時の話なども聞かせていただいて、とても貴重な経験になった。

私達が作ったのは倉庫の一部にすぎないが、少しでも被災地の方々の力になっていれば幸いである。完成した倉庫はチームみんなで見に行きたいと思う。



6. 南三陸町町長表敬訪問

8月22日、上山八幡宮の工藤宮司のご紹介で南三陸町の佐藤仁町長に表敬訪問をさせていただいた。

佐藤町長も実際に被災された一人で、震災時の状況を語ってくださった。津波の様子を確認するため防災対策庁舎の屋上に上がったところ津波に流されかけたこと、その直後に雪が降り始め屋上のアンテナに上った職員が持っていたライターで火を起こしてみんなで集まって暖をとり、一命を取り留めたことなど、壮絶な体験談を語ってくださった。また、南三陸町ではまた津波で大きな被害が出ないよう、住民の居住区を津波が来なかった高台に移し、もともとの居住区であったエリアには工場などを作ることで被害を少なくしようと考えているとも話された。

佐藤町長は、遠くの地、福岡から多くのボランティアが来ていることに対して、この震災が結んだ縁の強さを感じておられるようだった。また、私達に対して、「皆さんが今してくれていることは被災地のためのボランティアであるが、これは将来を担う若者が成長するための本当に得難い貴重な経験である。そういったつもりで今後とも頑張ってもらいたい」と励ましの言葉をいただいた。

今回、第1次派遣隊からの繋がりを通し、このような表敬訪問をさせていただき、貴重なお話を聞くことができた。改めて、活動することでできる人と人の繋がり大切さを感じた。



左から小林拓海（全体リーダー）、佐藤仁町長、本村麻菜美（全体リーダー）、山口武夫隊長

4 派遣隊員レポート



1. 学生レポート

Aグループ（体力班）

乾 旭秀（経済学部産業経済学科） Aグループリーダー

東日本大震災から約2年がたち、私が普段生活している上で、被災地の情報を目にすることが減りました。私の大学生生活も残り1年を切った時に、今回の第2次派遣隊の募集を見て、実際の被害状況・復興状況を自分の目で見ておきたいと思い、参加しました。

現地で私が3日間活動した南三陸町本浜地区は、住宅街のあった場所でした。しかし、今は見渡す限り平野が続いていました。津波により、住宅は基礎だけが残されていた状況です。私達は50人ほどで活動に参加しましたが、3日間で作業できたのは家3軒ほど。私は復興にはとてつもない時間、人手がかかるものだと感じました。また、がれき撤去の作業といっても、大きながれきだけでなく、細かながれきも取り除かないといけません。活動をしている中で、ボランティアに多数の様々な人間がかかることの大切さを感じました。

私がこれからできること、それは現地で感じたこと、思ったことを人に伝えていくことだと思っています。今回このような機会を与えていただいた福岡大学と、ボランティアで出会えた派遣隊の素晴らしいメンバーに感謝いたします。

坂西 結（商学部貿易学科） Aグループサブリーダー

震災から1年半以上経ち、ニュースなどでもだんだん取り上げられる機会が減っていき、九州で暮らす私達は震災前と特に変わらない生活を送っていました。この派遣隊の募集を見て、このまま何もせずに震災の衝撃を忘れてしまいたくない、せっかくチャンスがあるのなら行ってみたいと思い応募しました。

実際に宮城県に行き、目にした光景は、想像以上に衝撃的なもので、私達が出来ることとはとても小さなことでした。しかし、この第2次派遣隊に参加したことはとても大きな経験となりました。現地の人は復興に向けて一生懸命頑張っておられてパワーをもらいました。福岡に帰ってきて、今私が暮らす日常がどんなに幸せかということを実感して、涙がでました。本当にいい経験をさせてもらいました。また南三陸町を訪れようと思います。

合力 佳奈（法学部法律学科）

現地に向かうバスのなかでまず目に入ってきたのが、まっさらな土地です。広場のようにも見えた、そこにあったのはよくみるとたくさんの家の土台でした。そこにあるがれきを私達は分別し、撤去する、という作業を中心に行いました。がれきのなかには、かけた茶碗、真空パックされた食品など、人々が生活していたことがわかる生活用品が1年半以上たった当時でも、たくさん残っていました。友人や家族にこれらの、自分が見て、聞いたことを伝えます。そして、多くの人に活動に関心をもってもらいたいです。実際に見ないと分からないこともたくさんあります。活動の最終日には南三陸町の復興商店街に行きました。現地の人々は被災地ではなく復興地として前に進まれていました。

今回私達ができたのはほんの一部のことでしたが、力になれたことを誇りにおもいます。そして、100人をこえる仲間との出会いにも感謝しています。またこうしたボランティアに参加していきたいと思います。

梅田 保奈美（商学部商学科）

私は、震災から1年半が経つというのに、被災地の方々のために何一つ行動を起こせていませんでした。このままで自分はいいのだろうかと考えていた時に、友人から今回のボランティアの話を知り、参加することに決めました。

私は主にがれき撤去をしましたが、その中から食品の缶詰や、お皿などが出てきた時には、津波によって一瞬にして日常の生活が奪われたのだと思うと、胸が締めつけられ涙が出そうになりました。

今回の活動を通して、今私はどれだけ恵まれた環境で生活できているのかということを感じ知らされました。これからも震災のことを忘れることなく、微力でも支援を続けていきたいです。

岡嶋 静香（理学部化学科）

「テレビで見る被災地を自分の目で見たい、自分ができることがあれば力になりたい」そんな気持ちで応募した「東日本大震災ボランティア第2次福岡大学派遣隊」。

現地の方の話を知り、実際に体力系の活動をし、この5日間で多くのことを学び、感じました。日々の生活がいかに不自由なく幸せなことなのか、改めて感じ知らされました。

現地の方の「人の心を癒すのは、物じゃなくて人なんだよ」という言葉で少しは現地の方の力になれたのかなあと思いました。

しかし、ボランティアに行った私達の方がより現地の方から元気をもらった気がします。現地の方の前向きに頑張っている姿をみて、私は、何事も全力で取り組んでみたいとなりました。

これから私達にできることは、被災地で見たもの、聞いたこと、感じたことを“伝える”ことだと思います。また、このボランティアでの多くの出会いを、今後大事にしていきたいと思います。

中山 泰輔（工学部建築学科）

ボランティア作業は、夏の炎天下の中、活動することは決して楽なものではありませんでした。しかしながら、被災者の方々の苦しみに比べると小さいものだったでしょう。石巻に最初着いたときは、衝撃を受けました。震災から1年半経つので、ある程度復興しているだろうと考えていた自分は、津波に流され骨組みだけの建物や、山積みになっているがれきを目の前にし、言葉を失いました。テレビで東北の震災の映像が流れている前で、自分の部屋でだらだら過ごしていた自分が恥ずかしくなりました。

ボランティアに参加することで、現地のボランティアセンターの方々、被災者の方々など、隊員を含め多くの人と交流することができました。年齢、性別、価値観の違う人々が復興という一つの目標に向かって協力し、達成する。ここに、私は人の強さを感じました。一人ひとりの力はちっぽけですが、その力が合わされば大きなものになる。最近のニュースでは、もうほとんど震災のことは放送されていないのが現状です。だからこそ、震災を風化させないためにも、小さいことですが、震災のこと、ボランティアで体験したことをなるべく多くの人に伝えていきたいと思います。

高野 裕衣（工学部建築学科）

私がこの東日本災害ボランティアに参加した理由は、人の役に立ちたいという想いと、テレビの映像でしかみたことのない被災地の状況をテレビを通してではなく自分の目でみて確かめてみたいという想いからでした。

実際に現地に行き、被災地の現状を自分の目でみてみると、大きながれきは少なかったものの、自分が思っていた以上に復興は進んでいませんでした。

がれきの撤去作業には重機を使用すると、莫大なお金がかかってしまうので、人の力が必要とされていました。しかし、約60人で3日間がれき撤去作業しても住宅2軒分にも満たないほどのがれきの撤去作業しかできませんでした。

現地でがれき撤去の方法を教えてくださいました方々は周りの人に被災地の現状を伝えてほしい、とおっしゃっていましたが、まだまだ復興支援は必要だと感じました。

東日本大震災の復興を風化させないために、できるだけ多くの人に被災地の現状を伝え、これからも自分のできる復興支援を続けていきたいです。

吉富 大輔（工学部機械工学科）

私は、東北でのボランティアで感じたことが二つあります。

まず一つ目は、住民の強い思いです。がれき撤去を手伝っている時に感じたのですが、あれだけ大きな津波で、家などが跡形もなく流されてしまったのに、絶望することもなく、故郷の復興に力を入れていました。その思いに私は感動し、また一緒に頑張ろうという気持ちで満たされました。

二つ目に、日本のボランティア意識の高さです。テレビやネットなどで被災地の現状を見ることは簡単ですが、助け、手伝い（ボランティア）に行くことは難しいです。ですが、私達がボランティアをした3日間で、沢山のボランティア団体と共に行動しました。自分を含め皆、東北を救いたい、手伝いたい気持ちで一杯だと思います。福大でもボランティアに行きたいと思った人が300人以上もいるわけです。これからもっと、ボランティアに意識が向くよう友達などに、私が感じたこと、経験したことを話していきたいと思いました。

最後に、これからボランティアをしてみたいと思っている人へ。私の考えですが、一人が笑えば皆が笑える、つまり笑顔は伝染します。被災地の皆さんを笑顔にするには、まず自分が笑顔でいましょう。そうすればきっと、有意義なボランティアになるはずですよ。

植木 哲（薬学部薬学科）

2011年3月11日、この日私は文字通り「信じられないもの」をテレビで見て、自分の中の平和は崩壊しました。その時、私はなんらかの形で被災した方を直接支援したいと思いました。そして大学に入って「東日本災害ボランティア」に応募しました。その時、震災から既に1年半以上が経過しており、現地はある程度は復興が進んでいると思っていました。

しかし現状はまったく異なり、片付けきれない街の残骸が散らばっていました。それまでメディアは頻繁には取り上げなくなり、世間の関心も薄まっていたことでしょう。そこで私は正しく知ることの大切さを知りました。操作された情報を信じ込んで、行き先のわからない募金箱にお金を入れることは「他人事」の範囲内ではないように思え、小さくとも直接の支援が必要だと感じました。

実際に被災地で行ったことはちっぽけなものでしたが、確実に力になれたという実感が得られました。復興が完遂するまではまだまだ長い年月がかかり、物資・資金・ボランティアは今後も必要でしょう。そのために私達が被災地への関心を絶やさないことが大切だと感じました。

穴井 稔也（スポーツ科学部スポーツ科学科）

今回、東日本大震災の被災地でがれき撤去を行い、人と人が支え合い・協力しあうことによって生まれる大きな力というものを体感しました。私達が被災地のためにできたことは本当に小さなものだったと思います。しかし、どんなにささいな活動・募金であっても被災地を想う多くの人の心が集まることによって復興はなされるのだと実感しました。

私は教員を目指しています。今回派遣隊として被災地で私が目にし、考え、体験したすべてを子供達に伝え、人のことを思い・自ら考え・積極的に行動できる人間を育てていきたいと考えています。自分の中でとどめるのではなく、まわりの人に広めていくことが派遣隊の使命だと思います。

今回のボランティア活動で人生における貴重な体験ができたのも、支援くださった福岡大学・被災地の方々・派遣隊の仲間がいたからです。今回関わってくださったすべての方に感謝します。ありがとうございました。



がれきの撤去作業



道路が陥没して海水が入ってきている



南三陸町ボランティアセンターの受付



津波で壊れた防波堤

Bグループ（体力班）

原口 茜（商学部第二部商学科）Bグループリーダー

今回の派遣隊活動を終えた時、やりきった感じがあまりありませんでした。私達にできたことは本当に復興という大きなプロジェクトの中で考えると微力なボランティアだと思ったからです。だから、福岡に帰ってきてでもボランティアを続けよう、現地のことを伝えたいという気持ちが強くありました。

私にはボランティアに対して苦い経験があります。大震災が起きた 3.11 直後、私は自分の所属するバスケットのチームで急遽募金活動をする事が提案され翌日に博多駅で募金活動に参加し、私が抱えていた募金箱にたくさんの人が募金をしてくれました。私はその活動から1年以上の間、日本に起きた大災害なのに動けなかった自分がいました。そんな自分にもう戻りたくありませんでした。幸い私にはグループリーダーをさせてもらって派遣隊員とのたくさんの出会いがありました。その素晴らしい出会いを活かしてBグループを中心に九州豪雨災害八女へのボランティア活動を行っています。私はこれからもボランティアを続けたいし東北への気持ちも風化をさせたくないです。それが私に出来ることだと自分に言い聞かせてこれからもがんばりたいと思います。

竹内 清太郎（商学部商学科）Bグループサブリーダー

私が今回ボランティア派遣に参加しようと思ったきっかけは、テレビを見ているだけでは現地のことが良くわからず、実際に行ってみて現地の方と接することで、色々学ぶことがあるのではないかと考えたからです。私達の班は、体力班としてがれきや生活用品が埋まっている土を掘って分別する作業や泥の詰まった溝を掃除する作業を行いました。

実際参加してみて、思ったよりも復興が進んでいると感じました。特にボランティア最終日前日に訪れた南三陸さんさん商店街でお話を聞いたとき、そう感じました。ここで聞いたお話はこういうものでした。「津波で色々なものが流され手元には何もなくなりました。最初は本当にどうしようもなかった。余裕がなくてね…。でも少しずつとはいえ復興してくるとね、余裕も戻ってきて進んでいこうと思ったの。それで手始めに商店街を復活させようと思ったの。」この話を聞いて、こんな状況になっても立ち直れて進めるんだなと思いました。この後お店で食べた海鮮丼は何故かとても美味しく感じました。

私はこのボランティアで南三陸の方の声や考えに触れることで、テレビを見るだけでは分からない現状や南三陸の方とのふれあいという貴重な経験を得ることができました。これはなかなか得ることのできないモノだと思います。この話を周りの人にも伝え少しでも知ってもらえるようにしたいと思いました。

門根 彩乃（経済学部経済学科）

今回の第2次福岡大学派遣隊に参加することにより多くのことを学ぶことができました。私は体力班に所属し、南三陸町のがれき撤去作業を行いました。事前研修で東北の現状などは調べていましたが、実際に見た光景は想像を絶するもので言葉になりませんでした。なにも分かっていなかったと思い知らされました。がれき撤去という作業はとても大変で大人数で作業したにもかかわらず、1日でできたのは家一戸分だけでした。しかし一人ひとりができることは小さいけれど、その積み重ねが大事だと感じました。

ボランティアセンターの方に、地元の方は被害のあったこの場所に来たがらないと聞き、現地の人々の受けたショックは相当のものだっただろうと感じました。その中で、漁師さん達がすぐに漁に出ていたというお話を聞き、そのたくましさに感動しました。そのお話をしてくださった方も、会社を辞めてずっとここで作業をしているそうで、その行動力と気持ちに感動しました。私はその方達のように住み込みで作業をすることはできないので、福岡でできることをしていきたいです。

そこで私はまずできるだけ多くの人に現地の現状を伝え、誤った考えをもたないように話してきました。このボランティアを通して感じたことのひとつに、派遣隊の一人ひとりの意識の高さがあります。みんなしっかりと自分の考えを持っており、とてもいい刺激になりました。この思いを風化させたくないと思い、私達Bグループを中心に集中豪雨で被害にあった八女にもボランティアへ行ってきました。ここでやめてはいけないと思います。南三陸町で出会ったボランティアセンターの方の行動力を見習い、派遣隊や八女での経験を活かし、これからも活動していきたいと思います。

吉田 智彦（法学部法律学科）

今までこのボランティアに参加するための下準備で知った情報からは想像もできない世界が広がっていた。1年半以上経っていても何も復興が進んでないところは沢山あり、第1回の派遣隊の写真とは違い、何も残ってない土地に草だけが生い茂っているあの光景は今でも忘れられない。また、現地の人による、津波の被害を受けた場所で聞く生々しい惨状も耳から離れられない。地震、津波という自然災害の恐ろしさは本当に想像以上のものだった。

今回の活動で私は主にながれき撤去の作業を中心に行ったが、これがまた思うように進まなかった。3日間で50人ほどが行った作業は住宅2棟分に達するかどうか位であった。復興支援の大切さ、難しさを身をもって実感した。私自身、この「東日本ボランティア第2次福岡大学」派遣隊に参加してたくさん学ぶことがあった。被災地で感じたことは忘れることはない、むしろ沢山の人に知ってもらいたい、知らせていかないといけないと思う。

蔣 明樹（商学部経営学科）全体サブリーダー

東日本大震災から1年半が経ち、メディアの報道も減ってきたので、もう復興作業は終わりに近づいているものだと思っていました。しかし、現実とは違いました。見渡す限りの野原・積み上げられたがれき、TVの報道で見たままの光景がそこにはありました。

被災された方々とお話しすると、皆、声を揃えて「この現状を風化させたくない、させてはいけないんだ。」と言っていました。また、「普通に暮らせていることを幸せと思いなさい。」と言っていました。

私は今回の活動を通じて今、自分が「普通」に思っている生活・境遇・仲間の大切さを改めて実感し、より一層大切に生きていこうと思いました。また、被災地の現状をより多くの人々に知ってもらうために今、自分にできる身近なことからやっていくことが自分に課せられた使命だと思いました。

森廣 大地（工学部社会デザイン工学科）

今回、現地に行くまでは何ができるのか漠然とした気持ちでしたが、実際に現地の悲惨な状況に衝撃を受け、使命感のような思いが湧き上がってきました。被災地で実際に現地の人から話を聞き、とても心に大きな傷を抱えながら復興に力を入れ日々頑張られている姿を見て心をうたれました。活動

を通じ、現地の方々に我々の気持ちを伝えられたことと、現地の状況がよくわかったことです。私達が行った活動はほんの少しでしたが、作業をするときにはがれきに見えるその一つ一つが生活の一部であったことを忘れずに、その人の今までの町や家での生活を考え、一つ一つ丁寧に気持ちを込めて作業を行うことの大切さを学びました。また、今後の生活を支えるにはどのような支援をすべきか考えながら関わりを持つことの大切さを感じ、この東日本大震災を風化させないように周りの人々に伝えていかななくてはいけないと思いました。

砥綿 倅平（工学部電気工学科）

私は今回、宮城県南三陸町に第2次福岡大学派遣隊として参加させていただき、自分の目で見ることによって被災地の現状をしっかりと知ることができました。1年半という月日がたったにもかかわらず辺りを見回すと、復興にはまだほど遠い状況で衝撃を受けました。活動中はがれきの撤去が主な作業でした。50人くらいで一日中がれき撤去を行っても家一軒終わるのがやっとなので、私達の存在は微力なものだと思い知らされました。ですが現地の方々が、私達のような派遣隊が来てくれなかったら自分達で活動しなければならぬのでとても感謝しているとの言葉をいただき、私達のやってきたことは無駄じゃないと感ずることが出来ました。やっぱり実際に行ってみることで、思うこともたくさんあるし、私自身の考えも変わりました。自分の目で見て、現地の方の話がたくさんの人に伝えることによってまた、違うボランティアの人が現地に足を運ぶというループを作ることが必要だと思います。またこれからも支援や募金などできる限りのことは行っていきます。

最後に私達派遣隊を支えてくださった先生方、現地でお世話になったスタッフの方々お世話になりました。本当にありがとうございました。

松枝 美華（理学部地球圏科学科）全体サブリーダー

私は今回、1日目は体力班としてがれきの撤去等の手伝いを行い、2・3日目は現地の土を使って作られているレンガ造りの手伝いをしました。

震災が起きた当時は、東北の情報もたくさん入ってきたし募金活動等も活発に行われていた記憶があります。しかし1年半経った今、東北が復興した訳ではないのに九州にはほとんど情報が入ってきていない気がします。そんな状況の中、私は今の本当の現状を知り少しでも力になりたいと思い、参加しました。実際の現場ではまだまだ復興が進んでいませんでした。驚いたと同時にこのまま風化させてはいけないと強く感じました。遠くにいる九州からでもできることをしたいと思ったし、東北で頑張っている方にエールを送り続けずと繋がってみたいと感じました。その1つとして、手伝いをしたレンガを使って倉庫が作られるそうなので、完成した倉庫をチームの皆で現地に見に行きます。

土岐 多聞（経済学部産業経済学科）

行く前は、調べたもので現地を想像することしかできなかった。実際に行くとこの目で見ると、何もない光景に目を疑ってしまった。また、復興にはまだまだ遠いと感じた。現地の方の話をきいて、テレビや新聞より細かい状況を得ることが出来た。当時の困難さがより伝わってきた。

がれき撤去をしていく中で、土の中からでてくる家庭用品、貝殻、ガラスなど様々なものが津波の悲惨さを物語っている。また、周りの大きな建物の破損部分も津波の大きさを示す。

一日中がれき撤去をやっても無力さを感じる。それでも、前に進んでいる現地の人達のすごさと大変さが分かった。短い3日間だったが少しでも役に立てたことが自分の中でよい経験になった。また、共にボランティア活動をした大切な仲間ができ、現地のおいしいものも食べることが出来、今回の活動が自分の中でとても大きな財産になった。また、行ける条件がそろえば現地に行きたい。この経験を多くの人に伝えていく。

三小田 有希（法学部法律学科）

私が派遣隊に参加しようと思ったのは、春休みが終わり、2年生になる少し前の時期だったと思います。大学に入って、みんなと同じように、授業を受け、バイトに行く。そんなありふれた平凡な大学生活が、自分をダメにしているのではないかと不安に思ったのがきっかけです。

被災地の一つの街が津波の力により平地に変わってしまった景色は衝撃的でした。たくさんの方が生活していた場所、ふるさとが一日のうちに奪われてしまった現状を実感し、なんとも言えない悲しい気持ちになりました。

派遣隊の活動では、私は体力班に加わり、3日間、被災した家の基礎の掘り出し、ゴミの分別作業を行いました。ここでの作業はとても過酷であり、強い日差しと暑さとの葛藤でした。とてもきつい作業だったのですが、この作業で派遣隊の団結力が高まっていくのを私は実感しました。このきつい作業の中で何より輝いて見えたのは、ボランティアセンターの方の生き生きとした姿でした。ボランティアセンターの方は、皆、被災地出身の方ではなく、震災のニュースを見て、自分達も何か役に立ちたいと全国から駆けつけてきた方達で仕事を辞めてきた方々がほとんどでした。私はそのボランティアセンターの方と作業の間、お話をする機会があったのですが、その決断力と責任感の強さ、社会奉仕への思いに圧倒されました。私自身、学生の身で、ボランティアセンターの方々のような生き方はできないと思いましたが、その方々から人生を全力で生きるたくさんのエネルギーをもらいました。派遣隊での活動も終わり、数ヶ月が経ちましたが、派遣隊でできた人の繋がりはまだ続いています。この活動を終え、様々なことに対する見方が変わりました。

この繋がりをまた誰かのために生かしていきたいと思います。

田熊 公尊（理学部地球圏科学科）

私は理学部地球圏科学科で地震などの地学分野に興味があったので、一度自分の目で見てみたいと思い参加しました。実際行って見て被災地を目にした瞬間は言葉にできなかったです。テレビで見ているものはほんの一部にしかすぎず、約1年半以上たってもこの程度しかという感じでした。本当にがく然としました。

ボランティア活動としてはがれきの撤去、分別を行いました。がれきの中には瓶やビデオカセットなど震災の前にそこで生活していたことが分かる物もたくさん見つかりとても無念でした。また、3日間やり続けてもほんの少しの部分しか片付けることができず、改めて震災の大きさに気づかされました。

そして私が1番みなさんに伝えたいことは「自分達が今、何ができるかを考えてほしい」ということです。まだまだ復興には時間がかかります。ちょっと被災地のことを思うだけでも良いと思います。



上山八幡宮までの道のり



上山八幡宮を参拝



南三陸町役場の防災対策庁舎 骨組みだけが残った



ホテルでのリーダー会議



移動バスに張ってあったステッカー

Cグループ（体力班）

原田 大輔（工学部建築学科）Cグループリーダー

テレビや新聞でしか見ることのできない被災地の現状を自分の目で見たいと思い、このボランティアに参加した。東北大震災から約1年と半年が経ち、今ではもうメディアであまり報道されていない。私は復興がかなり進んでいると思い込んでいた。だが実際に被災地に行ってみると、復興が進んでいるのは一部の地域でまだまだ手つかずの地域も残っていた。60人で3日間の作業を行って片付いたのは民家3軒分だった。周りには作業前の民家がまだ数多く残っていて、私達がこの3日間で出来たことは本当に小さなことだった。でも小さなものでも積み重ねれば大きなものになる。私達がこの経験や被災地の現状を伝えて、1人でも多くの人にもう1度震災の恐ろしさを思い出させ、復興を応援する気持を持たせることができれば大きな力になると思う。今回の派遣隊で被災地の現状を知ることができた。さらにこの派遣隊にグループリーダーとして参加したことで人間的に大きく成長することができ、またたくさんの繋がりができた。この繋がりを大事にして、この経験を将来に生かしていきたいと思う。

最後に、今回私達にこのような貴重な体験の機会を与えてくださった福岡大学教職員の方々、特に事前研修から報告書まで取り仕切ってくださった古賀さん、本当にありがとうございました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

原田 加奈子（法学部経営法学科）Cグループサブリーダー

2011年3月11日。あの日私は、東北の町が海にのみこまれていくのを、テレビで眺めていることしか出来なかった。自分の無力さを思い知り、それでも東北の力になれないだろうかと考え、この派遣隊への参加を決めた。

しかし実際は、与えることよりも、むしろ与えられることの方が多かったと思う。ボランティアは一方通行では成り立たない。ボランティアを受け入れてくださる側にも、負担をしいることになる。作業道具や施設をお借りしたり、指示を仰いだりといった具合に。そして何より、ボランティアは、こちら側がしたい支援ではなく、相手の求めることに、迅速に対応する柔軟性が求められる。ボランティアが一方通行ではないというのは、相手が求めていることを考え、感謝の気持ちを常に忘れないことなのである。この学びを次に繋げていけるよう、私は身近な地域の奉仕活動から取り組みを始めたところである。

本村 麻菜美（法学部法律学科）全体リーダー

震災から約1年半以上経ったこの時期に私達に出来ることはあるのだろうか。昨年よりも心のケアに力を入れようと皆で試行錯誤して準備してきたけれど、私達は誰かのためになることが出来るのだろうか。この気持ちは出発前、派遣隊員みんなが思っていたことだと思います。たくさんの不安を抱え、東北に向かいました。

そして、東北での活動を終えた今、私はボランティアに行ってもよかったと心から思っています。体力班の私達が出来たことといえば、3日間で家の約2軒分のがれき撤去でした。プログラム班でも、形に残る活動はあまり出来なかったかもしれません。しかし、現地の方達と話をして、「福岡という遠く離れた所から学生が来てくれる」ということだけで現地の方達にとってプラスな働きになることを知

りました。風化させないことが、復興地のためになるのだと強く実感しました。

このボランティアを通して、自分自身大きく成長させてもらいました。そしてたくさんの出会いと新たな繋がりが出来たことにとても感謝しています。

堀 亨輔（商学部貿易学科）

私は南三陸町でボランティアを行いました。災害から約1年半たちましたが、被災地はいまだに当時の災害の恐ろしさが残っていました。実際に現地で作業することで、現地の人のお話を聞いて本当に身近なことだと感じました。今回復興作業を行うために私達のように他県から多くの人達がきて作業を行っていました。人と人の繋がりの大切さを改めて実感しました。私達が今できることはこの経験を生かし少しでも多くの人達に被災地の人達の声を伝えていくことだと思います。一人の力は小さいけれど一人一人が手を取り合って協力していけば、力は何倍にもなります。毎日なにごとなく暮らせることはとても幸せなことだと感じました。同じ日本人として少しでも力になりたいといつも考えています。一人でも多く自分と同じ考えを持っている人が増えると嬉しいです。

私は今回この福岡大学派遣隊としてボランティアに参加できたことは、とても良かったと思います。またこのような機会があればぜひ参加したいです。

足立 花奈（経済学部経済学科）

私は体力班のグループで、津波の被害を受けた宮城県南三陸町の民家の清掃をさせていただきました。私は東北大震災から約1年半たった被災地を見たとき、驚きました。私はもっと復興が進んでいることを想像していたからです。しかしそれには理由がありました。作業の休憩中に私はボランティアセンターの方とお話をさせていただき、その方がこのようなことをおっしゃっていました。「がれき撤去は行わず、埋め立て作業を行っている地域もある。しかし、ここは手作業でがれき撤去をしている。その家の持ち主やそこを通る地域の方はそのようなボランティアをしている姿を見ることで勇気ももらっている。」私は早く復興することも大事かもしれないけど、ゆっくり被災地の方の心の傷を癒しながら復興作業をしていくことも大事だと思いました。がれき撤去の作業は被災地の復興だけでなく、被災地の方々に元気を与えることができたと分かり、とてもうれしかったです。

前田 光太郎（法学部法律学科）

「自分の目で見て感じる。」この言葉は、東北でボランティアをする以前から多くの方から言われ、何度も耳にしていた言葉であった。私は、福岡大学派遣隊の一員として活動させてもらったことで、身をもってこの言葉の本当の意味を知ることができた。

今回、私が東北でボランティアをするきっかけとなったのは父の存在が大きかった。父は、2011年3月11日に起きた大地震の翌週から仕事の関係で現地に向かっていた。雪が降り積もる中、食料も十分でない状況でさらに余震の影響も受けていたため、父は何度も命を落としてしまうのではないかと思いついておどろいていたという。そういった父の経験を聞いているうちに、本当に自分の住んでいる国で起きていることなのか信じられず胸が締め付けられた。しかし、そういった気持ちが私を動かす原動力となっていた。

研修を経ていざ現地に着くと被災から約1年半以上経過しているというのに、辺りには多くのがれき

や岩などが散乱していた。その光景は、当時起きた自然の脅威を物語っていた。派遣隊としての活動が終わった今もなお、その光景を思い出すたびにあのとき感じた虚しさと同時に、東北の風や海の匂いまでもが蘇ってくる。この経験こそが、「自分の目で見て感じる。」の本当の意味であると思う。

被災地はまだ被害の影響が深刻で、現在も沢山の人手を必要としている。そういった事態であることや、私が経験したことを周りの方に伝え、私自身も復興支援を続けることで、決して風化させないことが今の私の使命である。

安河内 駿平（経済学部経済学科）

昨年の夏休み、私は東日本大震災のボランティアを行うために宮城県南三陸町へ行きがれき撤去や溝の掃除などを行いました。

そもそも私がこの活動に参加した理由はテレビでしか分からなかった被災地の状況をちゃんと自分の目で確かめ、理解したかったからです。

そして実際に行ってみて驚きました。現場に行く前までは建物の痕跡がどのように残っているのか気になっていたのに、何もかもがなくなっていたからです。百聞は一見にしかずという言葉がありますが、まさにそれだと思いながら、埋まっているがれきを撤去する作業をひたすら続けました。とても暑い中、作業をするうちに、ここが日本だということを忘れ、遺跡の発掘作業でもしているような感覚になったことを今でも鮮明に覚えています。2日、3日と続けていっても慣れることなどないようなとてもきつい活動でした。しかしそんな中で、今自分が何気なく過ごしている毎日がとても貴重なものなのだということに気づきました。

これは実感してみないと分からないことです。これに気づいただけでも行ってよかったと思います。しかし今回私達が被災地に貢献出来たかと言えば、そんなに役には立てなかったと思います。私達が行なったことは些細なことに過ぎないからです。

でも今回の活動で私の考え方は大いに変わりました。そしてこれからの生き方も毎日少しずついいので変えていこうと思います。

是松 佳奈（経済学部産業経済学科）

2011年3月11日。何気なくテレビをつけると、津波により車や家、人が流されていた。最初は映画を見ているようで、現実を受け入れることができませんでした。苦しんでいる人の映像や言葉もでないような映像を見ていることしかできず、直接的に援助したいと思い参加しました。

実際に震災の場所に赴いて、改めてその被害の深刻さを知りました。震災から約1年半以上が経過した今もなお、まだまだ復興支援が必要だと痛感しました。道に山積みになった車やがれき。めくれたコンクリートや倒れた電柱。がれき撤去をしているなかで、土に埋もれた洋服や茶碗などの様々な生活用品が次々と発見され言葉を失うことばかりでした。

現地ではまだまだ支援を必要としています。この先何年もかけて支援していかなければならないと思います。実際に被災地へ行き支援することは簡単にできませんが、遠く離れた場所からでも、募金活動や節電することなど、できることは多くあると思います。私が経験したこと、感じたことを1人でも多くの人に伝えていきたいです。そして1人でも多くの人に被災地への関心を持ってもらい、支援の輪を広げていければいいなと思います。



南三陸町ボランティアセンター



ボランティアセンターにあるメッセージ



南三陸町のボランティアスタッフからの説明



民家から掘り出されたビン



がれきを細かく分別



民家の輪郭が浮き彫りになる

Dグループ（体力班）

市川 泰子（薬学部薬学科）Dグループリーダー

住んでいた家が津波にのまれ、今は土台だけが残る。それが、現地に着いて私が目にした最初の震災地の姿であった。震災から1年半以上経過しニュースなどで報道されることが減り、震災に対する人々の関心が正直薄れつつあるように感じる。被災者の方々は皆、元の生活に戻ることが一番の願いだという。自分の普段の生活がいかに恵まれたものか、当たり前のことなんて何一つないと思った。しかし、夏の派遣から3ヶ月たった今、自分の日々の生活はどうだろう。遠く離れた東北に足を運び、僅かながらも復興のお手伝いをさせて貰い、たくさんを感じ、学んで帰って来たはずなのに、色々なことの有難さをすぐに忘れてしまう。

今後、被災地は新しい建物が建ち、時間がかかるにせよ眼に見える形ではどんどん復興が進んでいくだろう。その姿を見にまた必ず行こうと思う。それまでに今の私ができること。忘れないための努力、この派遣隊の絆を大切に、感謝の気持ちを胸に抱いて日々の生活を送っていきたい。

熊谷 海（人文学部歴史学科）Dグループサブリーダー

昨年3月31日。大学生活の一貫として「青春18切符」でどこまでいけるかというのを友人と試している時に、震災から一年経った被災地を見に行こうということで、私は石巻市にいました。当時ボランティアなんか考えてなかったですし、石巻に行こうとした時も深く考えていませんでした。しかし、街を抜け川沿いに立った時、私は言葉を失いました。鉛色の空の下で船が何隻も陸上に打ち上げられ、家は破壊され、1年という歳月をもってしても、そこだけ元から何もなかったかのような光景が続いていました。

その後、福岡に戻り第2次派遣隊のお知らせがあった時、私は迷わず応募しました。それが現地を見た人間の取るべき行動であったと思っています。そして8月の後半。また東北の地を踏んだ日は、日本で一番暑い日だったと後から聞きました。うだるような暑さと、かすかに香る潮の匂い。遠くで聞こえるかもめの声に耳を傾ければ、震災前まで漁業で栄えていたことも伺い知ることができました。区画された家や工場があったであろう更地に立ち、スコップを握り、土を掘り進める。時折、洋服や缶詰など、住宅にあったであろうものを掘り起こすと、なんとも言えない気持ちになりました。私達派遣隊が3日間かけて行った作業も全体で見ればほんの僅かな復興作業だったと思います。しかし、この僅かが続けば、いつの日にかすべての作業が終わり、また新しい街ができると信じています。

最後にボランティアセンターの方からきいた地元の人達の話で印象的だった言葉で締めさせていただきます。「祖先からずっと、漁業という営みで、この海に生かされてきた。この海がなければ、私はいない。だから津波を私達は恨んでいない。」

大坪 彩音（経済学部経済学科）

私は自分の目で被災地を見て、直接被災者の方の話を聞いて災害の凄まじさ恐ろしさなど、色々なものを感じたいと思い今回のボランティアに参加させていただきました。実際に被災地を見てみると何も言葉にならなくて、被災された方の話を聞くと涙が溢れました。そんな中で自然の恐ろしさはもちろんのこと、人の温かさや家族への愛情、仲間や友人との絆、何か力になりたいと頑張るボランティ

アの方々の思いなど、いろいろなものを感じることができました。そして私自身の考えも今までとは大きく変わったと感じています。

被災地で過ごした5日間は、この活動で出会った同じ意志を持った仲間と協力して作業をすることができとても充実したものでした。最初は不安も迷いもあり、こんな気持ちで被災地に行き役に立てるのかと思っていましたが、本当に参加してよかったと心から思っています。私はこのボランティアでとてもいい経験をさせていただきました。

後藤 祐樹（法学部経営法学科）

私は募金だけでなく、他にも何かしたいと思っていました。そんな時、昨年に続き「第2次派遣隊」の募集があり、応募することにしました。現地に行くまでに、さまざまな事前研修や学内での募金活動をしました。

実際に現地に行ってみると、私は言葉を失いました。建物はほとんどなく、あったとしても鉄骨だけが残されており、まるで戦後のような光景でした。そこで津波の恐ろしさを感じました。初日に宮司さんとその娘さんのお話や紙芝居をしていただきました。話の中で一番心に残っているのが「被災された方にとってがれきではなく、今まで共に生活してきた家族であり、財産である」という言葉でした。

私は体力班で3日間とも快晴で暑い中でのがれき作業は正直大変でしたが、現地でしかできない貴重な経験ことをさせてもらいました。学校の代表として行かせてもらい、また共に作業した新たな友との出会いに感謝するとともに、今回体験したことを自身の財産とし、多くの人に語り継いでいこうと思いました。

山口 晋平（理学部地球圏科学科）

ボランティア活動を通し、被災地の地域は復興の真ただ中であるということを改めて認識した。私は体力班に配属され、土台だけとなった建物から生活用品やがれきなどを掘る作業を行った。炎天下の作業だったが、体力班の人や教職員の方々、現地のボランティアスタッフの方々の協力のおかげで、3日間の作業で掃除した場所はかなり綺麗になったように思う。また、3日間で隣の区画で同じ作業をしていた奈良の高校や慶應義塾大学のボランティア、社会人ボランティアのグループが作業しているのを見て、励みになった。土台だけで礫や生活用品が土に埋まっているような場所は、2012年8月の時点でかなり残っており、人の手の要る作業が必要である。また福祉や教育、漁業などの産業で何不自由しない日常生活を取り戻すのはまだまだ時間がかかるため、その分野でのボランティアもまだまだ不足している。そのために、機会があればボランティアにまた行こうと私は考えている。

山崎 健史（商学部第二部商学科）

2012年8月20日～8月24日までの5日間私は東日本災害ボランティア第2次福岡大学派遣隊として宮城県南三陸町に行きました。私がそもそも派遣隊に参加しようと思った理由はテレビからではなく自分の目で現地を確かめたかったからです。

8月20日福岡空港に集合し空を飛び立って2時間ぐらいで仙台空港に着きました。そして仙台空港からバスで現地まで移動している時私は上空から見た感じ普通の街並みに少し安心していましたが、そこからバスで更に30分位したところに凄まじい量の車の残骸が目にとまりました。そこから高速道路に

入り両サイドを見渡すと、片方は町があり、片方は何もない殺風景な平地になっていました。正直驚きを隠せませんでした。まさかこれほどとは思い驚いていると、更に現地に近づくにつれてそれは益々ひどくなっていったのでした。私達は実質3日間でいったい何ができるんだろうと思い現地に降り立ちました。まず私達は上山八幡宮に行き現地の人の当時のお話を聞き、命の大切さ、また時間の大切さ、平凡な時間の幸せさを痛感させられました。2日目からはよいよ作業開始です。私は体力班だったので、ひたすらがれきを分別し重い石などをどけつつも遺留品など探し続けました。1日9時から15時まで休憩をはさんで5時間スコップに一輪車で働き続けました。連日の暑さからか体力の減りはハンパではなかったですけど、人のために少しでも役に立ちたい私には3日間しかないんだと思うと、なぜかがんばれました。活動が終わり家に帰ると家族から日焼けで真っ黒になったことを笑われたのを覚えています。

できたことは少しかもしれないですけど、私はこのボランティアに参加できたことで学部の枠を越えての仲間、そうして助け合うことの大切さをより深く知りました。ここでできた仲間のことを一生大事に想い時間を大切に、これらかも私は前に進んでいこうと思いました。このような企画に参加させてくれた福岡大学の教員の方々にお礼を申し上げると同時に現地の方々、ボランティアの仲間にも感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

大蔵 一聡 (理学部化学科)

東日本大震災が発生して1年半以上が経ち、ある程度の復興は進んでいて、がれきの撤去作業は、ほとんどなく地域の方とのレクリエーション等が多いのではないかと予想していました。しかし、実際はまだ撤去できていない場所もたくさんあり、私達が活動した実質3日間では全然足りないということがわかりました。震災の影響を全然受けていない九州では、ほとんどの人が記憶の片隅にすこしとどめている程度ではないかと思います。学生である私自身にできることは少ないですが、被災地を実際に見たこと、まだまだ復興に時間がかかることなど忘れず、伝えていきたいです。

坂井 茉凜 (工学部電子情報工学科)

私は3日間体力班で作業を行いました。大きな機材では取り除くことのできないものを取り出す作業を行いました。手にしているスコップを動かすたびに、がれきと呼ぶには程遠い、食器や日常生活品などあらゆるものが土の中からでてきました。3日かけて1軒の家の跡地が姿を現しました。玄関があり、お風呂場だったのであろう跡があり、ここで人が暮らしていたことを改めて認識しました。そして作業をしている際に、土の中から女の子のものと思われる小さな長靴を拾い上げました。それを手にし、土をきれいに払い、色んなことを考えながら地面にそっと置きました。

約2年の月日が経ちましたが、震災のニュースを目にしたのがつい最近のことのようです。復興にはまだまだ時間がかかります。私達それぞれが目にしたもの、感じたことを一人でも多くの人に伝え、風化させずにこれからの繋げていかなければなりません。

村岡 璃子 (商学部貿易学科)

震災以来、被災地へ行って何かしたいと思い続け、やっと被災地へ行くことができた。南三陸町の光景を見てショックだった。テレビで観ると実際に見るとでは違い、恐ろしくなった。家の跡地、

めっちゃめっちゃになった車、言葉が出なかった。被災した上山八幡宮へ行き、話を聞かせていただいた。「ボランティアに来てくださる方、来なくても心配してくださっている方々のお陰で、被災地の気が浄化されている。私達は浄化されている。気が良くなっていっている。」という言葉が印象に残っている。被災地の方々は、震災を経験しなかった人達の思いをどう思っているのだろうという不安がずっとあったので、有難い言葉だった。3日間、がれき撤去作業をした。必死に作業をし、ボランティアセンターの方に「助かった。」と書いていただいた。少しホッとした。

被災地は、まだまだ復興の途中。私は、南三陸町は海の幸が美味しくて、単純に良い所だと思った。観光で被災地へ行くだけでも被災地のため、被災地の方々の活力に繋がると思うので、まずは被災地へ行ってみたい。

川原 璃夏 (商学部貿易学科)

被災地を実際に自分の目で確認するまで何も分かっていなかった。応募した際は東北で自分が何か力になればという思いだったがグループ会議を重ねるごとに周囲の意識の高さ、情報量の違いに圧倒され私程度の気持ちでいってよいものかという気持ちが生まれた。

1日目の紙芝居、被災された方のリアルな生の声は心に刺さるものがあった。当時、東北の方が生きようと必死に逃げ回っていたとき私は何をしていたのだろう。きっと思い出せないくらいの日常をのうのうと過ごしていた。このボランティアの経験をしていなかったら、この実態を知ることもなくこんなに深く考えることもなかった。これはとても怖いことである。日本でこんなにも悲痛な出来事が起きているのに、東日本大震災の状況を知らずに生きている日本人はどれほどいるのだろう。なにかできればという気持ちで行ったはずなのにこちらが感じ、考えさせられることがとても多かった。この貴重な体験をさせていただいた私の使命は、この実態を伝え地震を忘れずに絶対に風化させないことである。



粘土を型にいれ土ブロックを作製



レンガ(土ブロック)班の作業風景



南三陸町さんさん商店街



陸前高田市の奇跡の一本松

Eグループ（子供班）

矢野 雅貴（商学部経営学科）Eグループリーダー

私が東北ボランティアに参加したのは、震災から11ヶ月経った2012年の2月に1度個人で東北のボランティアに参加しました。その時は、ただ単にボランティアをやってみたい、被災地を1度見てみたい、という安易な考えでした。しかし、実際に被災地を見て愕然としました。目の前に広がるがれきの山、打ち上げられた船、もうすぐ震災から1年経つというのに進んでいない復興。その時、もう1度この被災地でボランティアをして、少しでも被災地の復興に貢献したい、というのが今回、ボランティア派遣隊に参加した理由でした。今回は、レクリエーションで被災地の方と関わってみたいという思いで参加しました。

実際に参加してみて、私は今回子供のお世話を主にしました。子供達は普通に元気よく遊んでいましたが、家が流されて仮設住宅で暮らしている子もいて、震災の影響を身近に感じました。しかし、それ以上に子供達が元気で、逆に私達が元気をもらったようでした。被災地を見て、まだまだ復興には程遠いので、また来てボランティアをしたいです。

小倉 望未（人文学部文化学科）Eグループサブリーダー

東日本大震災があった日、私は高校生で、部活終りに携帯電話のニュースに目を奪われていました。私の目の前には、いつものように学校があり、グラウンドがあり、隣には友人がいて、先程までボールを追い掛け走り回っていたのです。その瞬間に、同じ日本で、多くのものが失われていたことを、容易に受け入れることはできませんでした。それからの日々で震災についてたくさんの情報を与えられるものの、反して私を取巻く環境は変わらず平凡でした。私の身近な人々も、そのように感じていました。

地元を離れて大学へ進学するという自身の大きな変化の中で、私はあの日携帯電話の画面越しに見ていたものを自分の目で見たいと思って派遣隊に応募しました。東日本大震災を遠く感じている人に、身近な人間が現地に行くことで、意識を変えて欲しかったのです。私自身もそうで、派遣隊に参加した結果、東北との繋がりを感じられました。

私の周りの多くの方が、派遣隊でのことに耳を傾けてくれます。それは、関心を向けるということは、震災支援への一歩だと思います。少しでも多くの方が一歩踏み出せる手助けになるように、被災地で経験したことを多くの人に伝えていきたいです。

宮本 美歌（人文学部フランス語学科）

私がこの派遣隊に参加したきっかけは、第1次派遣隊をニュースの報道で知ったことと、実際に被災地がどうなっているのか、何かできることがあればという思いからです。

私は2日間子供達と触れ合いました。子供達は、本当に元気で明るい子ばかりで震災を経験している子供達だということを私が忘れてしまう位でしたが、ふいに津波の経験を自分から話し始めたことが今でも印象に残っています。がれき撤去では、未だに資金が足りず復興が進んでいない現実を目の当たりにしました。今でも被災地で苦しんでいる人、前に踏み出そうとしている人など一人一人がどう考えているかはニュースだけではわかりません。実際に行かないと感じられないことをたくさん学ぶことができ、またそれを少しでも多くの人に伝えて行きたいと思っています。また、復興が終わるま

で東北のことを決して忘れず、ずっと見守っていきたいです。

原 悠理（法学部法律学科）

2011年に地震が起こった時、テレビや新聞で報道を見て何かしなければと思いながらも何もできないまま1年が過ぎそんな中、大学でボランティアを募集しているのを知り応募しました。報道されているのを見るのと違い、実際に見た時にはなんて言えばいいのかわかりませんでした。今回の活動では話を聞いたり、子供達と遊んだり、がれきの撤去をしたりと短い期間でしたが色々経験させてもらいました。私は、1年半がたった今でもまだまだ支援が必要だと思いました。

私がボランティアに行く知り関心を持ってくれる人がたくさんいました。今回は短い期間でしたが周りの人に経験したことを話し、関心を持ってもらうことで支援につながるのではないのかと思います。またこのような機会があれば、参加したいです。

進藤 美沙紀（商学部貿易学科）

私は友人に誘われてボランティアに参加しました。行くまでは私が今現地に行つてなにができるのか、復興の役に立つのか不安でした。ボランティアの日が近くなっても不安は大きく私が行つていいのだろうかとも思いました。実際に行つて見た光景は想像以上のものでした。がれきなどはほとんどありませんでしたが骨組みだけになってしまった建物や基礎だけの家はメディアを通してではわからない震災の被害の大きさ、悲惨さを感じました。震災で悲しい思いをしているはずの子供達が笑顔で元気に遊んでいるのを見て私のほうがたくさんの元気をもらいました。

現地の方が「復興はしてほしいけど震災がおきた跡は残してほしい」とおっしゃっていた言葉がとても印象に残っています。今回私がボランティアに参加したことで少しでも復興の役に立てていたらいいなと思います。

永野 璃（商学部第二部商学科）

3月11日、あの時見た恐ろしい光景が頭から離れずに、募金活動やイベントを行っていました。ですが、現地で直接支援をしていないことが気がかりで、このボランティアプログラムに参加しました。やっと東北に行けることが嬉しくて、どんな出会いがあるのか、どんな学びがあるのか、自分がどれほど貢献出来るか、そんなことで頭がいっぱいでした。

ですが、いざその地に立って言葉を失いました。がれきの山、折れた木、広く、何もありませんでした。今まで様々な支援活動をしてきて変な自信があった自分が、一気に小さく、無能なものに感じました。現地の人から聞く生の声はテレビや新聞で聞くものとは違う印象でした。でも、確実に復旧・復興しています。日本中で力を合わせることで、一つ一つ、一緒に乗り越えて行けるのではないかと思います。

これからも、被災地の復興に協力していきたいと思います。

熊手 朋稀（工学部社会デザイン工学科）

私は東北ボランティアを通して、考えることと実践することは大きくかけ離れていることを知った。初めて東北を訪れた時、震災から1年半も経っているにも関わらず被災地に残る「傷」を全身全霊で

感じた。その「傷」には目に見えるものだけではなく目に見えないものまで存在した。現在メディアでは以前に比べて東日本大震災における情報発信の大幅な減少によって遠方の人々には残存する被害の「ありのまま」を伝えることが出来ていないのではないかと痛感した。現地の子供達は辛い過去を背負いながらも前へ前へと強い眼差しで進んでいた。私達はその「輝く光」に手を差し伸べたいと思うばかりであった。私達はこのボランティアを通して感じたことを1人でも多くの人に伝えその「思い」を共有するべきだと考える。もし大きな災害が日本でなくても、今度は同じ「地球人」として手を差し伸べたい。世界を変えることが出来なくても、「思い」を導くことは出来るはず。

古野 知滉（スポーツ科学部健康運動科学科）

着いた瞬間に仙台空港でまず驚いたのが、およそ3mの高さまで津波が来ていたということだった。海から1キロは離れているはずなのに、と、この時から恐ろしさを感じていた。

衝撃は次から次へとやってきた。塩害で使えなくなった田畑、家や建物があったであろう跡地、しおれた木々などが次々と目に焼き付いていった。道路を挟んだ向こう側は、全く何事も無かったかのように街がたたずんでいる光景も、どこか不思議だった。

被災地を直接見た後に被災された方々のお話を聞くと、地震と津波の恐ろしさを感じ、自分ができることの小ささを実感した。小学校での課外プールや、学童保育での子供達の元気の良さを見ると、ほっとすることの方がどちらかというところが多かった。被災地で関わったほとんどの人が元気で明るく、こちらの方が喜びを多く与えてもらったと思う。この3.11は決して忘れてはならないし、辛い思いをする人がこれから出ないように、ここから学んでいかなければならない。

三好 耕太（スポーツ科学部スポーツ科学科）

今回私がボランティアに参加した理由は、自分を見つめ直すため、東日本大震災という一生忘れることのない出来事を自分の目で確かめるため、誰かのために何かをしたかったためである。実際、現地に行ってみると想像を超える現実を目の当たりにした。震災から1年半以上が経過したが、「復興した」と呼ぶにはまだまだ程遠かった。私はがれきの撤去や、子供達と遊ぶことを主な活動としたが、全体の活動を通して現地の人のお話、町の状態、バスから見える風景、そのすべてが感慨深いものだった。特に子供達の無邪気に遊ぶ姿には、ホッとさせられ、震災に負けない元気な姿は印象的だった。

このボランティア活動を通して、現地のこと、自分が感じたことを伝えていかなければならないと思ったし、自分自身に対してもできることは何かを考え、行動するきっかけになった。これからはがんばろうと思う。

大川内 文哉（スポーツ科学部スポーツ科学科）

私が、この災害ボランティアの募集に気付いたのは締め切り当日だった。急いで応募を済ませ、結果を待った。私がなぜこの派遣隊に応募をしたかという、テレビやニュースから流れてくる映像や写真を見ても何も感じなかったからだ。というより何を感じていいかわからなかった。だったら行って見て感じて、そこで感じたことを行動に表したいと思った。後日、発表をみるとともに私の行動は行けない人の行動でもあると実感した。

そして、仙台空港へ向かう日が来た。正直、ワクワクしていたかもしれない。被災地のことを考え

ると思っはいけないことかもしれないが、どんな人に会ってどんな話ができるのか心の中は期待でいっぱいだった。その期待どおり学童保育も、土ブロック作りも人と人がつながってなしえるものだった。東北に行けてよかったと実感できるものだった。

今回の派遣隊が共通して言えることは自分達が楽しんでたことだと思う。ボランティアは自分達がやりたいと思っなしえるものであり、嫌々やっても意味がない。私は、東北にいて学んだことと同じくらい、今回出会った仲間も大切にしたいと強く感じた。



大谷公民館で子供達に歌のプレゼント



面瀬小学校での子供達との交流



面瀬小学校区学童保育なかよしハウスの児童達



馬籠小学校の子供達に学習支援



馬籠小学校の子供と



大谷小学校の子供達と①



大谷小学校の子供達と②

Fグループ（高齢者班）

岩崎 有也（人文学部教育・臨床心理学科）Fグループリーダー

私が今回のボランティアに参加した理由は、東日本大震災という九州から遠く離れた地で起きた信じられない事件を他人事にしたくない、自分の目で現状を見て現地の方と交流し、現実と向き合いたい、何かを感じたいと考えたからだ。

私達は約3ヶ月の期間で被災地の現状を調べ、被災地の方に何ができるかを考えた。歌を歌う、ハンドマッサージ、うちわづくり、みんなが案を練って被災地の方を元気にしようと意気込んでいた。しかし、実際に東北に行ってみて私達を待っていたのは、被災地の方の前向きな姿勢と、活力だった。被災地の方は復興に向けて先の見えない戦いを続けている。毎日を一生懸命生きている。ボランティアに来た私達にも、何かを伝えようと様々なお話を聞かせてくれる。

正直、私は今回のボランティアで被災地の方や一緒に行動を共にした仲間に、与えるよりも与えられることのほうが多かった。自分の無力さを痛感したが、自らを見つめなおす良い機会になった。少しでも自分の活動を無駄にしないため、目的意識を持ち、充実した日々を送る。

小倉 一馬（商学部貿易学科）Fグループサブリーダー

初日に被災地を訪問した時に、本当にこの場所に今まで街があって、生活していたのか信じられなかった。

ニュースで見て感じるごとと、実際に見て感じることはまったく違っていった。今までニュースだけを見て、何も行動に移せなかった自分を情けなく思う。

活動を通して短い期間で被災地のためにできることはほんのわずかなことだと感じた。

しかし、そのほんのわずかなことを積み重ねていくことで少しずつ変わっていくのではないかと思う。

一人でも多くの方が被災地を実際に訪れ、見て感じたことを周りに伝えて欲しい。

東日本災害ボランティアを通して強く感じたことは、自分のできることを継続していくこと、周りに体験を通して感じたことを伝えることだ。私はどんな形でもいいので今後も関わっていく。

佐藤 美晏（医学部看護学科）

私は、「東日本災害ボランティア第2次福岡大学派遣隊」に参加して、福岡では信じられないことを多く感じる事ができた。3日間の活動で、仮設住宅の方との交流や海岸清掃を行ったが、一番心に残っていることは現地の方に言われた言葉である。現地の方の言葉からは震災当時の状況が詳しく伝わってきて、聞いているだけでも心が痛んだ。「震災は言い換えれば戦争だ」ということを聞いたことはとても衝撃的だった。しかし、復興へも着実に近づいており、復興市場を開いて募金活動を行ったり震災の話をする事で風化を防いだりと様々な活動をされていた。この様子を見て逆に元気をもらった。その中で「観光でも良いから多くの人に東北を訪れてほしい、来るだけでも意味はある」というような言葉をいただいたので、この一度の活動で終わりにするのではなく、また必ず東北を訪れたいと思う。

藏本 彩加（薬学部薬学科）

バスから見えた景色はまるで昔から変わらずそうであったかのように思えた。見渡す限り何もない。以前は家があり、学校があり、お店があり、人々が生活していたはずなのに。それが感じられたのは地面に残る建物の基礎からだけだった。私はこの光景をどう受け止めればよいのか分からなかった。震災の壮絶な体験を聞かせていただき、現実起こったのだと改めて実感した。

今回のボランティアでは特に人々の強さと温かさに感銘を受けた。仮設住宅で窓拭きをした日、私は雑な扱いを受ける覚悟で行った。所詮私は実質3日ほどしか滞在しないボランティアだからだ。しかし仮設住宅の方々には温かく迎え入れてくれた。熱中症を心配し、何度も私達に「休んでね。」と声をかけてくれた。本当に涙が出そうになった。今回自分の目で被災地を見て、復興へは程遠いことを実感した。自分の体験を伝えることで、これからも少しでも自分にできる復興への手助けをしていきたい。

上野 紗季（人文学部教育・臨床心理学科）全体サブリーダー

私がこのボランティアに参加しようと思ったのは、福岡では他人事のようにになっている東日本大震災を、現地に行って1度自分の目で見ることによって、自分の中で何かが変わるのではないかと思ったからだ。実際に現地に行ってみると、やはりテレビで見るのとは大違いで、初めて被災地の様子を実際に目にしたときは何も言葉が出なかった。

5日間活動に向かうバスでの移動中、現地の至る所で目にした、津波で流されてほとんど土台しか残っていない家の跡が、福岡市内のどこを歩いても見受けられないことが、いかに幸せかということがよくわかった。上山八幡宮でのお話にもあったように、私達は「生かされて生きている」ということを強く実感した。だから、したいことやしなければいけないことは、思ったその日のうちにやっておくべきで、また簡単に「死にたい」などつぶやいてはいけないと思った。現地に行って、今を一生懸命生きることが、生かされている私達の使命であるということを知った。

信岡 陽香（人文学部文化学科）

私がこのボランティアに参加したきっかけは、この出来事を他人事と思っではいけない、そしてこの現実を受け入れることから逃げてはいけないと思ったからだ。東北に行って、自分の目でしっかり見て、現実を知らなければならぬと思った。

実際に行ってみて、私が見た景色は今も目に焼き付いている。元々町があったはずなのに、町があったことは感じ取れるのに、そこには何もなかった。バスを降りて足下を見ると、そこはリビングだった。衝撃だった。家がなくなりその場にタイルだけが残っていた。

また、私はボランティアで仮設住宅を訪ねた。楽しい時間を過ごして欲しくて、一緒にうちわ作りを行ったりお茶会を開いた。正直、私に何ができたのか今もわからない。ただ、皆さんの笑顔が嬉しかった。みんなの笑い声が広がったあの空間を、私は忘れることができない。今回は、ボランティアに行かせていただきありがとうございました。

若杉 智子（人文科学研究科博士課程前期）

「臨床心理士は役に立たない」

自ら臨床心理士としてご活躍されている先生のこの言葉が私を被災地に向かわせた。1年経った今、被災地の方がどのような状況の中にいるのか、なぜ心理士が役に立たないと言われるのか、現地に行ってみようと思ひ、第2次派遣隊に応募をした。

5日間の様々な被災地での体験は、福岡に戻って来てからの日々の中で役立っていると実感している。メディアや書籍で被災地のことを見聞きすると、「あの時のあの人、あの時のあの場所」という風に具体的にイメージすることが出来るようになった。それは私にとってとても大きな学びであり、自分の中で今回の災害を風化させない、できないものになった。今後、被災地の様子を見聞きすることは、ますます減っていく。私達のような若年層が自らの体験を伝え続けていくことが大事だと思った。

西村 瑠美（医学部医学科）

実際にボランティアをしたときには、現地の方々の「ありがとう、嬉しい」という反応が直に伝わり、やりがいを感じていた。しかし、その反応を客観的に評価する方法がなく、派遣期間も短かったため、果たして本当に何かの役に立ったかについては疑問が残っている。

ただ、ボランティア中やその道中に、現地の方々に触れ、話をしたことを通し、自分が得たものは多かった。私が今回の派遣で得た一番のものは、被災地と私をつなぐ関係を持つことができたということだった。

派遣当時は、震災から1年半以上が経ち、日本国内で生じたことにもかかわらず、遠く離れたところで起こったこととして、震災に関することの風化が心中では完全に進んでいた。だが、実際に現地足を運び、この目で高く積み上がったがれきや崩壊した建物を見、現地の方々の言葉や感情に触れたことは、心に深く刻まれている。今でもニュースを見ると「ボランティアのときに出会った、あの方々は元気にしているだろうか」と思い出され、私と被災地をつないでくれている。

山川 毅（経済学部産業経済学科）

「人との出逢い」。これが活動を通して得たものだ。仮設住宅での交流会で出逢ったお年寄りや子供達、現地で補助をしてくださったボランティアセンターの方々、そして、活動を共にした福岡大学の仲間達。ボランティアをさせていただいた経験も然ることながら、こうした出逢いを通じて、自分自身が大きく成長できたのではないかと感じている。

なかでも意識の高い学生と一緒に活動したことは、今まで以上に自分を客観視する良い機会となった。心配りができることは当たり前。皆、何かしらの目的意識を持って取り組んでおり、自ら進んで行動を起こせる。こうした、普段の学生生活で出会えないようなレベルの高い人に逢えたことで、自分の儂さを痛感することができた。

あの活動から何ヶ月か経過した今日。多くの出逢いから受けた学びをしっかりと享受できているだろうか。私生活で行動に移せているだろうか。振り返ることで自問自答するいい機会となった。

太田 実郷（人文学部東アジア地域言語学科）

東日本大震災が起きてから何度も災害についてのニュースを見て聞いて、ボランティアに行く前にも研修を繰り返して様々な情報を知ったつもりだったが、今回ボランティアに参加して、実際に被災地に行って活動し、現地の方と直接コミュニケーションを取らなければ分からないことが、本当に多くあるということを実感した。きっと被災地はこういう状態なのだろうな、被災された方はこんな気持ちなのだろうな、などいろいろと自分の中で思っていたも予想しなかった状態であったり、全く違う考えを持っている方がいたりと驚くことばかりだった。

福岡大学第2次派遣隊としての活動は終わったが、ボランティアに行ってそれで終わりにしてしまうのではなく、この貴重な体験を通して学んだこと、知ったことをより多くの人達に伝えていけるようにしたいと思う。

真島 慶子（医学部看護学科）

若者の力。私が震災ボランティアに参加して一番心に残っている言葉だ。ある方の息子さんが震災後の景色をみて、「僕には壊れたふるさとがある」と言った。大人はふるさとがなくなってしまったと思っていたが、本当は海も山もとても綺麗で全てがなくなった訳ではなかった。大人達はこの6才児の発言に未来への希望を見たとおっしゃった。他にも、東京から戻ってきて復興活動をしている青年の姿、ボランティアに来る青年達の姿にも明日への光を感じるとおっしゃった。

これからの生活でも、誰かに希望の光を与えられるような生き方をしたいと強く思った。



条南中学校仮設住宅での交流会



南最知仮設住宅でのうちわり

Gグループ（子供班）

古嶋 研史（薬学部薬学科）Gグループリーダー

被災地で少しでもいいからチカラになりたい、実際にこの目で見て何かを学びたいという思いから派遣隊に参加しました。宮城県で学童保育のお手伝いや住宅の跡地の清掃活動をさせていただき、その活動中現地の方々は、震災当時の様子から現在の状況などを教えてくださいました。

しかし、私の経験では想像もできないような話ばかりでした。今振り返ってみても、私の活動が現地の人の役に立ったのかどうか迷う部分があります。このままでは終わりたくありません。もし、日本のどこかで何らかの災害が起きたときにはすぐに現地へ向かい、チカラになれるような知識と技能を持つ人になりたいです。

糸濱 正晶（人文学部文化学科）Gグループサブリーダー

実際に被災地に赴き、その土地、人々と触れ合い感じたのは復興の前線に立っている方々はものすごく前向きに日々を生きているということです。遠方から被災地を思う人よりももっと、ずっと前向きでした。そんな彼らにパワーをもらう一方、バスの窓から見えた建物の真新しい看板や津波で更地になった大地、校庭で楽しそうに遊ぶ小学生の笑顔、そして矛盾を感じずにはいられないほどに美しくかった夕焼けに何かこみ上げてくるものもありました。

僕らが出来た復興は何なのか、ずっと考えていました。今回の活動のようにボランティアセンターの方々と一緒に働くこともそうだし、募金をすることも、ただその地を訪れることも、たまに被災地を思い出し思うことも立派な復興の一つだと思います。僕らは僕らの生活が目の前にあるわけで、支えなければならない土地があるわけで、自分の手の届く範囲だけでもいいと思うのです。そうやって人と人が手を取り合っていけば日本がもっと前向きに進むと思うのです。だから僕は毎年一度でもいいから東北の地を訪れようと心に決めました。

やはり実際に目で見て肌で感じないとわからない部分はたくさんありました。このような機会をくださった福岡大学には本当に感謝しています。ありがとうございました。

河野 亜紀子（人文学部英語学科）

震災が起きてからテレビや新聞でしか見られなかった被災地の状況を、現地へ行って直接見て触れて聞いたことは、とても貴重な経験となりました。3日間の活動のなかで2日間小学校に行き子供達と触れあいました。子供達はとても元気で私達が子供達から元気をもらうばかりでしたが、遊びながら一緒に話をすることができ、とても有意義な時間となりました。2日目の最後、子供達とお別れをするとき学童保育の先生が、「この街に住んでいるとこの街のことを忘れられていくような気になるときがある。でも、こうやってボランティアの方が来てくれるだけで有難い。」とおっしゃっていました。私はこの派遣隊に参加しましたが私に何ができるのだろうとずっと悩んでいました。でも先生の言葉を聞いて私に出来ることはこれだと思いました。3日間のうち1日はがれき処理をしました。津波で流された家の跡地を手で掘っていくのはとても辛いものがありました。この家に住んでいた方の大事にしていたのだろうと思うものがたくさん出てきました。現地のボランティアセンターの方の話でも、被災地の方は「何でこんなに来てくれるのが不思議で本当に嬉しい、ありがとうと思っている。」と

ありました。この貴重な経験をこれで終わりにするのではなく福岡にいて出来ることを続けようと強く思いました。震災があったことを私達が忘れてはいけません。

大原 加代子（人文学部フランス語学科）

私は東日本大震災が起こったあの日あの時、海外研修でフランスにいて、ちょうど帰国する日の朝ホテルのロビーでニュースを見ました。国外から客観的に日本を見て、被災地の人々の力になりたいと思い参加した今回のボランティアでは、よくある言葉ですがやはり現地の人々から逆に私達を得ることのほうが多くありました。私は学童保育の手伝いを主にさせていただきましたが、子供達や先生方から沢山のお話を伺うことができました。津波がすぐそこまでおしよせてきてあと一歩間違えていれば自分も巻き込まれていたこと、様々なものが流されてきて目を塞ぎたくなるような光景だったこと、ガス、水道が止まりトイレもできない状況で寒い中皆で助け合い1週間を過ごしたこと、おにぎりひとつのありがたみを痛感したこと。そして、ボランティアとして来た私達に伝えたいのは、「東日本大震災を忘れないでほしい」ということだと教えていただきました。いつどこで起こるかわからない地震。他人事だと思わず友人や家族や周りの人に、今回の活動で見て感じて学んだことを福岡に帰ったら伝えてほしいと仰っていました。私はこのボランティアに参加したことで考えや思いも強くなり、内定先は社会活動や環境活動に積極的に取り組んでいる企業に巡り合うことができました。このボランティアを通じて出会えた現地の方々や子供達、そして派遣隊の仲間感謝の気持ちでいっぱいです。

浜脇 慶成（法学部経営法学科）

未曾有の災害が起きてから何か自分にできることはないか。被災地に向けて直接何か九州に住む自分にできることはないのか。私は被災地に対して、募金活動、物資救援だけでなく直接何かしたいとずっと思っていました。そう思っていた時に学校のボランティアプロジェクトを知りました。

プロジェクトに直接参加させていただくことが決まり、現地に行くまでの研修や昨年の話や現地の情報を学ぶにあたり、私の被災地への思いはより一層募っていきました。

そして、実際に訪れた被災地。私はがれき撤去とプログラムどちらも経験させていただきました。私は被災地の今の様子を通じて、そこで生きる人々の思いを直接肌で感じ、この人々の想いを僕らが繋いでいくことの大切さを感じ取りました。この被災地で起きたこと、被災地に生きる人達の想いを背負っていくことは未来を生きる僕達の責任だと思いました。

最後に昨年の夏、このような機会を与えてくださった関係各位の皆様はこの場を借りてお礼を言わせていただきたいと思います。ありがとうございました。

山口 志保美（法学部経営法学科）

2011年3月11日の東日本大震災から約1年半。震災直後からメディアは被災地の現状や復興、震災の影響などを取り上げ、我々に伝え続けています。しかし、遠く離れているせいか真実味が湧きませんでした。メディアに報じられる真実をこの目で見たく、また、漠然と誰かの役に立ちたいと思い、今回の東日本災害ボランティアに応募しました。話し合いや事前研修を重ね、いざ東北の地へ。我々はバスの窓から見える、震災の脅威を目の当たりにし、悲しい現実を知りました。我々にできるボランティア活動はほんの些細なことで、長期にわたる支援が必要です。また、我々がしている“普通の生活”を見

つめ直し、感謝することも必要だと気づかされました。この経験や新たな価値観をメディアの声ではなく、わたしの声で伝えていこうと思います。わたしから人へ、人から人へ、さらに人へ、この連鎖が続いていくことがボランティアの持つ力となります。明るい“未来へ繋ぐ”をきっかけにわたし自身がなりたいです。

三角 梨奈（経済学部経済学科）

災害ボランティアに参加した理由はテレビの映像をみてずっと被災地の人々に何か役に立つことがしたいと思っていたからです。

私はプログラム系の活動として2日間気仙沼市の面瀬小学校の学童保育へ、体力系の活動として南三陸町でがれき撤去を行ってきました。南三陸町は沿岸部だったため、津波の影響を大きく受けていて家などの建物の多くが流されて何も無いテレビで見た映像と同じでした。

しかしがれき撤去していると洋服や生活用品などがたくさん出てきて震災前まで人が生活していたのだと実感し、胸が痛みました。

この活動をやってよかったと思うことは、これから東北の復興を担っていく子供達と繋がりが出来たことです。また、この繋がりを忘れずに子供達が大人になって復興に向けて活動するときには少しでも役に立つ大人になりたいと思いました。

地震や津波のことを風化させないためにも被災地の状況や私達の体験をたくさんの人達に伝えていかなければいけないと感じました。そしてこの活動を通してたくさんの方のことを学ぶことができ自分自身すごく勉強になったと思います。

谷口 亜沙美（理学部物理科学科）

東日本大震災を通して、改めて自然の猛威を感じました。位置が東北ということで福岡からは遠く、いくら大震災といえども、どうしても他人事としか捉えることが出来ず、どれだけテレビの中継を見せられても、直接自分が何かできるわけでもなくただ眺めているだけで、何も感じとることの出来ない自分がいました。それから半年程がすぎ、メディアでは被災地の現状を伝えるようなことも少なくなっていました。たまたま友達が自費でボランティアに行っていたので話を聞くと、直接行って体感するしかわかる方法はないよと言われ、福岡大学のボランティアに応募しようと決めました。

いざ研修に参加すると、研修の段階でも表面的なことしか分からず、直接現場に行ってみないと分からないという状況で、学生課の方や、同じ意思を持った派遣隊の皆さんで一から作っていく活動であることを実感しました。

ボランティアに参加する、ではなく、ボランティアをする、という自らの強い意志がなければ、被災された方々にも失礼であり、なにより自分がなぜこの活動をしようと思ったのかが分からないということを感じ、現地で活動した3日間は大学生活の中で一番考えさせられる機会だったのではないかと思います。

久保田 慶幸（工学部電気工学科）

私は体力系とプログラム系の活動をさせていただいた。体力系の活動では、土に埋まっている小さながれきを取り除くという単純な作業にもかかわらず、60人くらいで一日活動して作業できたのは家

の3軒分くらいの土地だった。このとき、自分のできることの小ささに無力さを感じた。プログラム系の活動では、小学校を訪れ学習支援と遊び相手になった。小学生はみんな元気で私は元気をもらうばかりで何もしてあげられなかったなと感じていたが、帰り際に「ありがとう」と言われ何か伝えられたものがあったと思う。今回の活動で経験したことはとても貴重であり、今後はこの経験をたくさんの人に伝え次の活動につなげる必要があると思った。

倉元 志穂 (医学部看護学科)

山積みの自動車や木材、打ち上げられた漁船、住宅地であっただろう場所に一軒もない家、人生で一度も見たことがない光景に私は言葉を失いました。そして何不自由なく毎日を過ごしている自分に腹が立ち、すごく心が痛みました。自分の目で、耳で、鼻で、手で感じるものと、テレビの画面を通して見るのでは全く異なり、まさにそれは「百聞は一見に如かず」でした。

活動初日に、「ほくのふるさとをがれきと呼ばないで」と言われたことがずっと頭から離れず、何と呼ぶのがふさわしいのだろうかともヤモヤしていました。5日間の活動を終えて福岡へ帰る途中、「がれき撤去ではなく、宝物探しだね」という同じグループの隊員の言葉に、気づくのは遅かったかもしれませんが、なんだか心のわだかまりがスーと解けていくような感覚になりました。がれきの中からは一年半以上たったその時でも実際に身体の一部や衣類などがでてきましたが、それらは遺族の方にとっての「宝物」だということを忘れていたような気がします。

今回の活動を通して、元気を与える立場だった私達は、被災地の皆さんにたくさんの元気と勇気もらいました。そして人間の心の強さ、温かさが、こんなにも人の心を変えてくれるものだとすることを教えてくれました。

10年後、20年後多くの人の想いで復興した街をこの目で確かめに行きたいと思います。

藤井 早紀 (医学部看護学科)

私は、震災が起こった時から何か私ができることはないのだろうかと考え、この活動を知り、参加することとなった。しかし、震災から1年以上が経ち、メディアでもあまり東北のことを取り上げられなくなった今、私達が現地に行ってもすることはないのではないかと半信半疑だった。現地につき、空港も復興が進んでいて、やはり復興しているのではないかと感じた。しかし、どんどん郊外に向かうにつれ、言葉を失った。建物はなく、建物の基礎だけが残っていた。その時、やることのないのでは…という考えから、私達がこの数日ボランティアを行ってもちっけなものにすぎないのではないかと考えた。それでも、少しでも復興が進むよう、活動を行った。そして、私はこの現状を目や耳、心で感じ、周りの人に伝えようと考えた。現地の方とふれ合い、感じたことは、当たり前ということはないのだということだ。自分の家があり、自分が落ち着いて眠れる場所があり、信頼できる家族・友達がいるということ。ボランティアとして活動したが、現地の方から逆に元気をもらい沢山のことを学ばせていただいた。そして考えた。私達が東北のために誰もが簡単にできること。それは東北であった大震災のこと、復興に向けて頑張っている東北の方々のことを忘れないことだと考えた。

Hグループ（子供班）

久保 敦子（経済学部経済学科） Hグループリーダー

私は、1、2日目にプログラム系、3日目に体力系をさせていただきました。まず、私が東日本災害ボランティアに参加したいと思ったきっかけは、震災の影響で子供達の遊ぶ場所や道具がないとテレビで拝見し、子供達の心のケアがしたいと思ったからです。

実際に現地で子供達の学習支援を行い、遊ぶ中で、子供達の元気な姿や笑顔に私自身が元気をもらっていました。体力系のボランティアではがれき撤去や側溝作業をさせていただきました。作業をする中で食器や衣服など生活をしてきたものが出てくるたびに心が痛みました。

今回ボランティアに行かせていただき、テレビやニュースだけでは分からない現実を自分自身の目で確かめ、現地の方のお話を通じて知ることが出来ました。だから、私達に出来ることは、実際に現地に行き活動することはもちろんのことですが、自分自身が考えたことや感じたことをより多くの人々に伝えることだと思いました。

橋目 雄太（人文学部歴史学科） Hグループサブリーダー

私は被災者の方々のために何か少しでも力になれることはないだろうか、また被災地の現状をニュースや新聞ではなく自分の眼で確認したいと思い、第2次派遣隊に参加することを決めました。被災地の現状は震災直後に比べ復興が進んでいましたが、なかにはまだがれきが積み上げられてたままの状態になっているところもありました。こうした現状について、最近ではニュースや新聞などで取り上げられることが少なくなったと思います。

このような中で今私達にできることは、この東日本大震災を忘れないことです。私は「現状と向き合っただけで頑張っているということを地元に戻って皆さんに伝えて下さい。」と言われました。私達にとって東北は遠く身近に感じる事ができないかもしれませんが、しかし、誰でも関心を持つことはできると思います。人を想う気持ちを大切に、震災を決して風化させないことが、今私達にできることであると今回の活動を通して改めて感じました。

東丸 卓矢（法学部法律学科）

今回、第2次派遣隊としてボランティア活動に参加したことは私にとって大きな経験になりました。事前研修等である程度情報を得ていたつもりでしたが実際に現地に行くことで自分が知っているつもりであったことを痛感しました。一人一人の力は小さなものです。ですがこの積み重ねこそが大切で大きな力になるのだと確信しました。現地ではがれき撤去、レンガ作り、子供達との交流をさせていただきました。復興に向けて前向きに生きる人々や、たくさんのボランティア団体の方と触れ合うことで自分達に何ができるのだろうと改めて悩み考えさせられると同時に、その姿をみて励まされ力ももらいました。今でも現地で遊んだ子供達の笑顔が頭から離れません。これから私達はこの体験を周りの人に伝え、少しずつでも広げていくことが大切だと思います。また、6月からの研修、炎天下のなか汗水垂らして共に作業した派遣隊の仲間と出会えたことは本当に大きな財産です。この繋がりを大切に、この貴重な体験を糧にしてもっと自分を成長させていけたらと思います。

椎葉 風太（人文学部歴史学科）

第2次福岡大学派遣隊として東日本災害ボランティアを経験した私達に今何ができるのでしょうか。私はこの経験を語り継ぎ、何らかの形で復興支援に携わることが大切だと思います。1日目に訪れた上山八幡宮の宮司さんの言葉が印象に残っています。「震災の真実、リアルを伝えて、多くの人に感じてもらおう。多くの人々の思い、祈りが被災地を浄化する。」

震災から約1年半が経っていましたが、現地にはまだがれきの山が広がっていました。がれき撤去作業中に当時の生活用品などが出てきて胸を痛めました。今、自分が健全に生活できていることの有り難さを改めて実感しました。交流した学童保育の子供達は元気いっぱい逆でボランティアに行った私達が力をもらいました。

今回のボランティア活動は私にとって本当に意味のあるものになりました。派遣隊の皆さんに出会えたことにも感謝しています。これからもこの経験を語り継ぎ、復興支援に携わっていきたいと思います。

小川 航平（理学部物理科学科）

今回の東日本大震災復興のボランティアを通して、多くのことを学ぶことができました。僕は3日間の活動期間のうち全てプログラム班として馬籠幼稚園で学習支援をしましたが、そこで普段できないような体験をしました。まず、主に担当した子がなかなか心を開いてくれず苦労しました。なるべく相手と同じ目線であることを心がけ接したところ、日に日にその子の笑顔が増えていくのが分かりとても嬉しくなりました。笑顔が増えていくにつれ自分の意見を伝えてくるようになり、僕の要求にも応えてくれるようになりました。その先生方に後から聞いた話だと、その子は人見知りでなかなか他人には懐かないがこんなに懐いたのは初めてといわれた時に諦めず接してよかったと思いました。

その他にも今回のボランティアで様々な学部、学年の知り合いもでき交友関係が広がったのも普段の学校生活ではなかなか出来ないことなのでよかったです。この経験を今回で終わらせるのではなく、また次の経験に活かしたいと思います。

畠中 マリ亜（薬学部薬学科）

私が、今回このボランティアに参加しようと思ったのは、少しでも誰かの役に立ちたいということと、災害から一年以上たった今被災地がどのような状況であるか自分の目で確かめたいという理由からでした。そして、実際被災地に行ってみて私が目にした光景は、私が想像していたものよりもはるかに衝撃的なものでした。すべてが流されてしまっていて建物がなく、以前家屋であったであろう場所はそのがれきが積み重なっているだけで、復興したとは言えない場所もたくさんありました。

実際に被災地に行かなければ分からないことを知ることができ、この災害は風化させてはいけないものであり、今後の課題として、被災地に行った私達が周りの人達に現状を伝えていかなければならないと感じました。今後も被災地が完全に復興できるように自分にできることを続けていきたいです。

藤田 大揮（商学部経営学科）

被災地のため、日本のために何か自分にできることはないか、そして大学生生活4年間で一番の良い経験にしたいと思い、応募したのがこの活動をするきっかけでした。東北震災ボランティアでの5日間はこれから先、一生付き合っていくであろう男女学年問わず色々な人達と友情関係を築くことができ、最高に充実した5日間になりました。ボランティアでは南三陸町で2日間がれき撤去、最終日は気仙沼市の小学校で子供達と交流をさせていただきました。2日間南三陸町でがれき撤去の活動をやらせていただいて、現状はまだまだ復興には程遠い状態だったので、もっと日本各地の人達が被災地に行き日本のため被災地のために活動をしていかなければいけないと改めて思いました。面瀬小学校では子供達の元気の良さに驚きました。こういう元気な子供達が気仙沼の未来を背負い生きていくのだなと思うと複雑な気持ちの反面、希望の光も見え、自分達も頑張らなくてはと思いました。子供達との別れ際は感極まって正直つらかったです。

この東北での5日間は自分にとって忘れることのできない思い出になりました。日々、当たり前な生活に感謝し、家族、友人全ての人達を大事にしなければいけないと思った貴重な体験になりました。

横尾 智美（法学部法律学科）

あの震災から1年半以上経ってもまだがれきが残っており、なかなか復興は進んでいませんでした。このような状況の中、私達ができることは微々たるものです。しかし、地元の方々にとって私達は、ただがれき撤去のお手伝いに来たボランティアという意味ではありませんでした。地元の方々から、「こうやって遠くからわざわざ来てくれるから、諦めることができないんだよね。ボランティアの人達が私達を諦めないように頑張らせてくれる。」と話してくれました。このとき私は、こんなにも感謝してくれて、必要としてくれていることを知り、本当の意味でのボランティアの役目に気づきました。ただ、先ほどに加えて、地元の方々から「政府の援助も終わるとされる3年目、ボランティアの数も減るだろう3年目以降が来るのが怖い。」と話してくれました。ここに風化の恐ろしさを感じました。

私達のボランティアはまだ終わっていません。風化させないためにもこの思いを伝えていきたいと思っています。

東郷 瑛（法学部法律学科）

私が東日本災害ボランティア福岡大学派遣隊に応募した理由は、被災地のことはこれまでテレビなどのメディアで知っていたけど、実際現地に行かないとなにも分からないんじゃないかと思い、また、少しでも自分に出来ることがあればと思い参加しました。現地に行ってみると、かなり整備はされているけどまだ震災での被害の爪痕が残っていて言葉にならない思いを経験しました。この活動を通して感じたことは人の強さです。もし、自分が同じ現状になったとしたら、ここまで明るく生活できるか疑問に思います。しかし、被災者の方は温かく私達を受け入れてくれて、逆に私達が元気をもらいました。

まだまだ、復興への道のりは遠いけれど震災のことを絶対に風化させず、ボランティアをしてあげるという上からの立場ではなく、被災地の方と共に支えながら復興していけるように自分にできる小さなことをこれからも続けていきたいと思っています。



馬籠小学校の児童に学習支援



面瀬小学校での清掃活動



面瀬小学校区学童保育のなかよしハウスの子供達と



面瀬小学校の校庭で子供達と一緒に



Iグループ（子供班）

尾関 直人（法学部法律学科） Iグループリーダー

私はこの福岡大学第2次派遣隊で初めてボランティアをしました。ボランティアを通して、復興とは、多くの人があるいろいろな形で、直接的に又は間接的に協力しあうことで時間をかけてゆっくりと実現される、チームプレーだと感じました。そして、微力ではありますが、その一員になれたことに誇りを感じます。

私は子供達を元気にしたいという思いでプログラム班を志望しました。しかし、実際に大谷公民館で学童保育を手伝わせていただく中で、逆に子供達から元気をもらうばかりでした。2日間の大谷公民館での活動を通して、元気な子供達の心の中には津波の記憶、被災したことの傷が深く根付いていることを知り、物の復興以上に人の心の復興には多くの時間が必要なのだと思いました。

今回グループリーダーとして、ボランティア活動をさせていただきました。事前研修、現地での活動など初めてで手探りの状態の中、リーダー達や班員のおかげで、やり遂げることが出来たことに感謝しています。年齢も学部も違いますが、同じ目的をもった熱い仲間達と出会えたことは私の財産です。

現地の方達にとって被災した経験はとても辛く、悲しい経験だと思います。しかし、現地の方が、また現地に行った私達が正しい情報を多くの人に伝えることで、辛いだけの経験ではなく、未来に繋がる経験にしていきたいです。

津崎 勇輔（人文学部文化学科） Iグループサブリーダー

私が今回のボランティアに参加しようと思ったのは、東北で大変な思いをしている人達に少しでも笑顔になってほしい、東北の現状をこの目で見て忘れないようにしたいと思ったからです。

しかし最初はボランティアメンバーとして選ばれたにもかかわらず何度もある打ち合わせに、あまり参加できなかつたり、正直こんな不真面目な自分が何をできるのかと自信を失っていました。

私は自信を失ったまま東北に行きました。そして被災地を見て自分の些細なことなどあっさり吹き飛んでしまいました。被災地は凄惨でした。町があったはずなのに、見えるのは家の基礎やがれきだけでした。あまりに非現実すぎて実感が全くと言っていいほど湧きませんでした。しかし一方で、自分が悩むくらいなら作業をしなくてはいというがむしゃらな気持ちが起こってきました。そして私は自分なりに一生懸命がれき撤去をしました。疲れたけれど、とても大切な経験が出来たと思います。

また、私は運良くがれき撤去の他に子供達と遊ぶというプログラム系にも参加することが出来ました。そこでは震災に傷つきながらも逞しく生きる子供達の笑顔がありました。彼らと会えたことは私の中でとても大きな財産になっています。

この活動を共にしたグループの皆はとても優しい人ばかりで、グループ活動が苦手な自分にも良くしてくれてとても嬉しかったです。

最後に、東北はまだまだ被災の爪痕が癒えていません。これを癒せるのは皆の協力だけです。まだ大震災は終わっていないということを忘れないで欲しいです。

右田 尚子（医学部看護学科）

私がこのボランティアに参加した理由は、自分の目で見て、感じたいと思ったことがきっかけで、自分に何か出来ることはないのかと考えていたからです。

がれき撤去を行いました。手作業でしなければならなかったため、一日ではあまり進みませんでした。がれき撤去の作業を通して、私達の活動は微力であると思い知らされました。しかし、必要なことであり、しなければならぬことであるから、続けていかなければならないということを考えさせられました。微力だからこそ、続けることが大切であると思います。がれき撤去が行われていない場所が多く、まだまだ人手は必要であると感じました。

復興までには長い時間が必要であると思います。東日本大震災を風化させないように、自分が見たもの、感じたことを人に伝えていきたいです。そして、このボランティアに参加して終わりではなく、これからも自分に出来ることは何かを考えながら行動していきたいと思っています。

坂元 翔太郎（理学部応用数学科）

自分の3日間の活動内容は、2日間のがれき撤去と1日の小学生との交流でした。活動する前はことの重大さを認識しておらず正直緊張感もあまりなかったと思います。

しかし、被災地の現場に足を踏み入れてとても衝撃を受けました。辺り一面何もない状況は自分の想像をはるかに超えていました。2つの活動をし終えて振り返ると、どちらの場合でも共通して、自分が出来ることはすごく小さく、限られており、正直被災地の復興に貢献できたとはとても思えません。

しかし、被災地の現状を知ること、そこで自分なりによく考えてみる、それが大事なことだと思いましたし、それを気づけたことが自分にとって大きなことです。

自分が出来ることは、被災地の現状をたくさんの人に伝える、被災の深刻さをより知る、ボランティアとして活動する。これに尽きると思います。これから積極的に取り組んでいきたいと思っています。

長岡 知宏（人文学部教育・臨床心理学科）

ボランティアに参加すると決めてから「自分に何が出来るのか、自分にもできることがあるのか」ということをずっと考えました。実際に被災地に行き、ボランティア活動をさせていただいてわかったことは、自分にできることはとてもちっぽけなことだということです。だけど、何もできないということでもないこともわかりました。このことに気づけたことが、自分にとってとても大きな自信になりました。

今回のボランティアを通して、たくさんの人と出会い、関わりました。このたくさんのお出会いも自分を成長させてくれたと思います。商店街の写真屋さんの方がおっしゃった、「本当の豊かさというのは物ではなくて人」だということを実感することができました。

今回のボランティアで学んだことは、間違いなく今後の自分の人生を豊かにしてくれるものだと思います。貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

牟田 千恵美（医学部看護学科）

東日本大震災が発生して約1年半が過ぎた現地をみたときは衝撃であった。未だに、建物などが流された後がそのままであったり、様々な場所にごみが高く積み上げられていたりしていたことから、この

場所が同じ日本であるのかと疑問を感じた。1日目に上山八幡宮で紙芝居や震災の話聞き、たくさんの命が失われた中でも生きている、生かされているということから命の大切さを学ぶことができた。そして、今生きているということは本当にすごいことだと思った。また、体力系での活動としてがれきの分別作業を行った。必死にしても少しずつしか進まず、土地を元のように使用するには計り知れない労力と時間がかかることを痛感した。活動を通して、現地に行ってみなければわからないことや、命の大切さ、仲間と協力することなど様々なことを学ぶことができ、貴重な体験をすることができた。この震災は絶対に忘れてはならないと思うので、今後も自分ができることを考えて行動していきたいと思う。

安田 史恵（法学部法律学科）

震災から約1年半が経った被災地の状況を見て、言葉を失いました。最近では、テレビなどでの報道が少なくなり、正直、復興は進んでいるものと勝手に思っていました。しかし、見えてくるものは大きながれきの山、壊れた建物でした。また、作業中に見つかった缶詰などの生活用品を見て震災の恐ろしさを感じるとともに、復興にはまだ時間がかかると思いました。しかし、多くの「がんばろう南三陸町」の文字があるのを見て、現地の人は少しずつでも前に向かって進もうとしている様子を感じました。中でも、子供達の笑顔に私達の方が元気をもらいました。

今回の活動は、私にとってかけがえのない経験でした。私が見て、聞いて、感じたことを1人でも多くの人に伝えていきたいと思います。また、1日でも早く復興できるように、これからも自分にできる被災地への支援を続けていきたいです。

芦澤 真美（人文学部教育・臨床心理学科）

私は、このボランティアがあると知ってから応募するか悩んでいました。今まで震災について目を背けて生活していて、知識もない自分が何かできるか、ずっと不安でした。しかし、今から大震災について学び、応募するからには東北の方々が私達と話す間だけでも、つらいことを忘れられるように努力しようと決意し応募しました。私は、ボランティアに行くまで被災者のためにできることは何かずっと考えていました。しかし、活動が続けていくうちに、毎日私自身が元気づけられたり学ぶことがあって、被災者のためにと考えると同時に、私自身のためにここにきているのだと気づきました。そして福岡に帰ってボランティアで体験したことを伝えるだけでなく自分が変わった姿、自分の行動から学んでもらえるように伝えることが大事だと、気づきました。

このボランティアで感じたことは、人が人に与える影響の大きさです。「頑張ろう！」という一言の重さ、同じ目的をもった仲間の大切さ、現地の人達の温かさに気づいた5日間でした。この5日間での体験は、過去のことにならないように多くの人へ伝えていきます。

小林 拓海（経済学部産業経済学科）全体リーダー

今回私は、全体リーダーとして東北に行ってきました。1年以上たった今、東北に行っても私達になにができるかを常に考えながら準備をして行きました。

実際に東北を訪れると、海岸沿いでは家が軒も立ってなく、家の基礎だけが残っており、大量に車が積み上げられているなど、今まで見たことのない光景がたくさんありました。ここで多くの人が

亡くなったのだと想うと何とも言えない気持ちになり、私達に何が出来るかももう一度深く考えさせられました。

私は、東北でがれき撤去活動と、大谷小学校の学童保育の子供達と遊ぶ活動をしました。がれき撤去では、家の基礎が残っている海岸沿いで土の中に混じった重機では取り除けない細かなガラス、自然に戻らない素材を使った家の壁などがれきを掘り出し分別する作業をしました。50人くらいが1日かけて作業した場所がった家2軒分しか進まなくて、ものすごく大変な作業で途方もなく時間がかかる作業でした。そこでは、ビンに詰まった食品など生活雑貨が出てきて、ここに人が住んでいたんだと何とも言えない気持ちになりました。

大谷小学校では、児童の心のケアをしたいということで活動させていただきました。しかし、私達の心配をよそに子供達はとても元気で、東北に来て意気消沈していた私達を励ますくらいの勢いがありました。私が出会った中で、運良く直接被害にあった子供達はいませんでした。それでも、庭まで水が上がってきたなどの話がありました。

私が活動していて、「このことを実際に見て感じたことを福岡に帰って伝えて欲しい」と「福岡という遠く離れた地からまだ私達のことを想ってボランティアに来てくれるだけでうれしい。ありがとう」とたくさんの言葉をいただきました。私は福岡に帰って親、友人、周りの人に自分がどんなものを見て、感じ、東北の方がどんな気持ちで頑張っているのかを伝えることが重要なことだと感じました。

入口 真依（人文学部ドイツ語学科）

2011年3月11日、私は海外研修先のオーストラリアのニュースでこの震災を知りました。目の前の映像が現実なのか、日本なのか信じられませんでした。今回第2次派遣隊に参加してまず感じたこと、そして伝えたいことは、1年半経っても復興していない場所が沢山あり、今も頑張っている人が大勢いるということです。

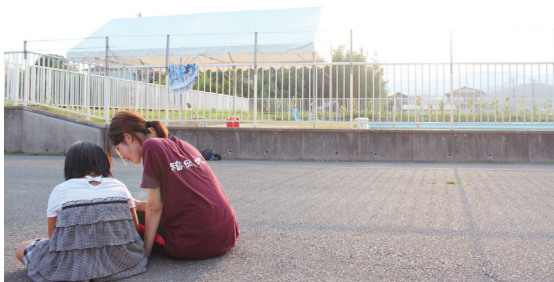
今回私は、震災に見舞われた人々に少しでも笑顔を与えたい、元気になってほしいと想う気持ちからレクリエーション班で子供に対する支援をメインに活動する予定でした。しかし、3日のうち2日は体力班としてがれき撤去の活動をすることになりました。1日目のがれき撤去の作業で、今でもこんなにがれきが残っており60人で一軒の家を半日かけても撤去しきれないことに無力さと、津波の恐ろしさを感じました。そしてもっと多くのボランティアが来なければ終わらないと思いました。2日目に小学校の学童保育に行った時、子供達に楽しんでもらえて、有意義な時間を過ごすことができましたが、本当にこの震災の支援としてこの活動は現地の人に求められているのだろうか、こちらの押し付けではないのだろうか、もっと復興のためにしなければいけないことがあるのではないだろうかという葛藤がありました。自分の出した答えが正解かは分からないけれど、3日目はがれき撤去ができてよかったと思っています。また絶対にボランティアに行きたいです。

福島 瑠美子（人文学部フランス語学科）

初日は「体力班」と一緒にがれき撤去をしました。ほぼきれいになっていて、復活しているものだと甘く考えていました。しかし、自分の目で見た地震の爪痕は想像以上に酷く、驚くばかりでした。作業は想像していたこととは違い、終わりが目に見えないために一人の力が、果たして復興につながるのだろうか、と考えることもありました。そして、2日目にはプログラム班の一員として小学校へ行きました。

小学校でもギャップを目の当たりにしました。事前に調べていたのは、「子供達は地震のことが原因であまり元気がない」というようなことでしたが実際はとても元気がよく、すぐに懐いてくれました。朝から疲れるまで遊びまわり、楽しい一日を過ごしましたが心の奥にはひっかかるものがあり、小学校を後にして考え続けました。それは、体力班は需要があり人手が足りないが、プログラム班は体力班ほど需要がなく、人手も足りている、ということでした。よく考え、プログラム班に所属しているから、最終日も小学校に行って交流をし、そして、再び東北に来て、復興支援をしようと決めましたが、やはり納得することができず、今、しなければいけないことをしておかないといけない！と強く思い直し、最終日は撤去作業に行きました。

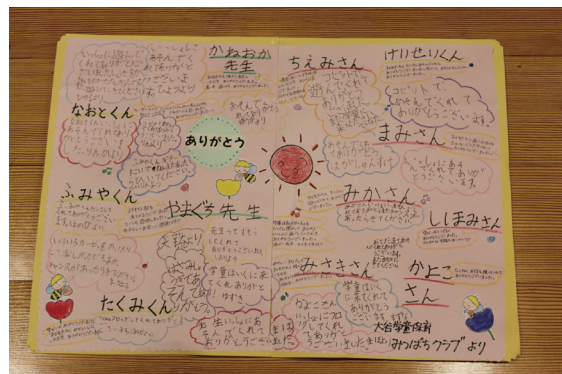
この3日間を通して学んだことは、「何が求められ、それに対し何をすべきか」ということです。何度も事前に調査をしても、実際のギャップに苦しみました。より深く、現地の方々に聞いておくべきであったと感じます。しかし、「体力だけ」や「プログラムだけ」ではなく2つの活動を体験できたからこそ復興支援について真剣に考え、学ぶものがありました。この体験を周りの人に伝え、いつまでも忘れずにしていかなければなりません。



子供達との交流



お別れの時のハイタッチ



大谷小学校の子供達の寄せ書き

Jグループ（高齢者班）

中野 加奈子（商学部経営学科）Jグループリーダー

被災し助かったが家族を失い一人で仮設住宅に住んでいて、自らを塞ぎ込み周りの方と交流をもつこともせず、孤独死してしまうお年寄りの方がいるという報道を私はテレビで、見て何かしたいと思っていました。

実際に私は気仙沼市の仮設住宅で、お年寄りの方と関わる活動を行いました。現地に行った私達にもまだまだ分からないことはたくさんあって、本当に凄まじい災害だったのだと感じました。現地に行って実際に目で見ないと分からない、伝わらないことばかりでした。

しかし行けた私達が帰ってきた今できることは、現地の方が言われていたように、風化させないこと。忘れないこと。東北から遠い福岡では、約2年経った今メディアで見るとは少なくなっています。自分が見て感じたことを伝えて、周りの人達にもずっと忘れないでいてほしいと思います。

派遣隊としてこのボランティアに参加出来て、同じ想いを持った仲間に出会えて本当に良かったです。私の人生の貴重な経験となりました。

永石 康平（人文学部文化学科）Jグループサブリーダー

私達が被災地で活動を行ったときは震災から約1年半が経っていましたが、事前研修を重ねて得たつもりでいた被災地のイメージとは異なっていて、今回の震災が奪っていったものの大きさを感じました。そのイメージとのギャップを感じた中でのボランティア活動、現地の方との交流は、今回の震災について正面から向き合うことができた貴重な時間となりました。

また自分の目で見た被災地の現状、自分が活動を通して感じたことを多くの人に伝えていく必要があると思いました。被災地の現状がメディアで取り上げられることは以前に比べると少なくなっていますが、まだまだ被災地ではボランティアの力を必要としています。この震災を風化させないためにも福岡大学派遣隊としての活動はこれからも継続してもらいたいと思うと同時に、私自身も自分にできる支援を継続していこうと思いました。

岳尾 亜耶（医学部看護学科）

3・11の惨劇をメディアを通して目にして以来、私でも何か役に立てることはないか考えていました。そしてこの派遣隊の存在を知り参加することを決めました。

今日、メディアによる被災地の報道が少なくなっています。そのため復興は大分進んでいるのではないか。そのような思いを抱え被災地に足を踏み入れました。しかし実際に待ち受けていたものは、津波により何も残っていない町や建物の無残な惨状、行き場のないがれきの山々でした。「まだ復興は進んでいない。」それが正直な感想でした。現状や被災者の生の声を聞き、改めて震災の被害の大きさを痛感しました。

私達ボランティアにできたことは、本当に小さなことだったと思います。しかし、まず被災地のために行動を起こすこと、継続的に支援することが大切であると感じました。被災地の現状をより多くの人に伝え、これからも私ができることを見つけ支援していきたいと思います。

三小田 理恵（人文学部歴史学科）

東日本大震災がおきた年の12月、私は所属していたボランティアサークルを通じて被災した方々にクリスマスカードを書きました。しばらくして返事が返ってきたのですが、そこに書いてあった当時の生々しい状況と全国の方々が応援してくださって嬉しいという文面に心を打たれ、私はこの第2次派遣隊に応募することを決意しました。はがきには仮設住宅の住所も書かれていて、機会があったらお会いしたいと考えていたのですが、残念ながらそれはできませんでした。しかし、現地での仮設住宅の窓ふきやお茶会などを通して様々な方々と交流することができたので、今回参加することができて本当に良かったです。

印象的だったのは、震災から約1年半経っているにもかかわらず、海岸沿いがまだ破壊的であったことと対照的に、現地の方々が生き生きとしていたことです。人間の生命の力強さを感じたとともに、私も頑張ろうと逆に元気をいただきました。

宗安 沙弥佳（経済学部産業経済学科）

応募者数が多い中、自分が派遣隊の一員に決まった時、嬉しさと同時にプレッシャーも感じました。自分のできることを精一杯し、現地で得た情報をたくさん吸収しようと思い、東北へ出発しました。

私は3日間いろんな場所に行って活動させていただきました。その中で、「復興なんて全然出来ていない」というお話を聞いたときは、「自分のやっていることは本当に役に立っているのか」と、とても考えさせられました。

しかし、その方は続けて「でも、こうして遠くから皆さんのようなボランティアが来てくれると本当に嬉しい。いろんな方の助けがあって今がある」と仰っていました。自分達の出来ることはとても限られていますが、これからもこのような活動に積極的に取り組んでいこうと思いました。

短い間の活動でしたが、共に活動した仲間と現地で出会った方々との縁を大切に、活動で学んだことをいろんな方に情報発信をしていきたいと思います。

太田 夕貴（商学部貿易学科）

私は、この東日本災害ボランティアに参加できて本当に良かったと思っています。このボランティアで今まで知らなかったことを知ったり、今までだったら考えなかったことに遭遇したり、得るものがたくさんありました。周りのメンバーもそれぞれ色々な思いを持っていて刺激させられました。被災地についたときは建物が、鉄筋だけになっていたり、家が流されて基礎だけが残っていて、ニュースなどテレビで見っていたものを実際にみてそのすさまじさに驚きました。また、立地によって被災状況も違っていました。がれきの処理をしている所もみましたが、まずそのがれきの量に驚きました。バスの運転手さんは、このまま市だけの処理だと100年はかかる量だとおっしゃっていました。私は、プログラム系のボランティアをさせていただいて仮設住宅で窓拭きや、交流会をさせていただきました。交流会では、たくさんの方々にきていただいてハンドマッサージのときには、災害時のお話をさせていただきました。実際に被災された方からお話を聞くとその時のすごさが伝わってきました。また、海辺の清掃では靴下、食器、家の瓦などがでてきて津波の悲惨さが伝わってきました。

私は、このボランティアで実際にいって経験したことを周りの人に伝えてこの震災のことを知ってもらいたいです。

小田 直樹 (医学部医学科)

2011年3月11日。未曾有の大震災が日本を襲いました。震災直後、陸上自衛隊東北方面隊が上空から撮影した、火の海と化した気仙沼の映像は、当時私の心をひどく痛めました。

震災から1年半たった今でも、テレビで見えていた気仙沼の漁港は津波被害の大きな爪痕を残していましたが、気仙沼横丁とよばれる復興屋台村が活気づき、復興に向け確実に歩をすすめる人達の姿がそこにはありました。気仙沼の海岸清掃では、服や歯ブラシといった、そこに住んでいたのであろう人達の生活の跡を感じさせるものを見つけるたびに、日常を奪われた人達の気持ちや津波の恐ろしさを想像していました。

現地の方が言われていたように被災地はまだまだ復興の途上にあり、ボランティアの力が必要です。福岡大学派遣隊が3次、4次と続くことを期待し、また私も何らかの形で携わって行けたらと思います。

被災地の一日でも早い復興を強く願います。

小豆野 愛理 (人文学部英語学科)

まず初めに、私が福岡大学の学生ボランティア派遣事業を知ったのは入学式の時でした。震災当時まだ高校生だった私は、ボランティア活動に参加したいと思いつつもなかなか行動に移せませんでした。だから、その話を聞いた時とても感銘を受けすぐに参加を決意しました。

私は仮設住宅の方との交流会やうちわ作りなどのボランティアをさせていただきました。活動を通して被災地の方のパワーをととても感じました。みなさん明るく元気で、「ありがとう」や「元気をもらったよ」などと声をかけてくださり、私まで元気づけられてとても胸が熱くなりました。

しかし、その一方で震災当時の状況や心境を話す表情には悲痛な思いがありました。公民館にあった七夕の短冊には、「一日も早く家に戻れますように」や「復興が進みますように」などの願い事が書かれており、今なお厳しい現状を改めて痛感しました。

今回、自分の目で被災地を見て直に感じるという貴重な体験をさせていただき、とても感謝しています。そして、進まない復興や被災地の方の現状を多くの人に知ってもらうために伝えなければならないと思います。それが私達の使命だと思います。

本山 陽菜 (医学部看護学科)

私はプログラム系のお年寄りのケア担当のグループだったので、仮設住宅の清掃、交流会の催し、ハンドマッサージ等の活動を主にさせていただきました。私は東北の被災した方々がどのように現実と向き合っているのかを実際に肌で感じ、少しでも被災された皆さんの役に立ちたいと思い今回の第2次派遣隊への参加を決めました。震災の爪痕は未だいたるところで見るとれ、日々の生活の中でも震災のことを思い出すにはいられない状態でした。そのような中、被災された方々は私達に震災や津波の恐ろしさを伝えるために、つらい過去と向き合いながら様々な話をしてくださりました。本当にとてもいい勉強になりました。現地で自分ができたことといたらとても小さなことであつたと思うけれど、現地で学んだことは今までにないくらい大きな経験になったと思います。

江藤 ちなみ（理学部地球圏科学科）

私は東日本震災ボランティアのプログラム班として参加しました。私達の班は老人班で、仮設住宅に住む方々と関わりました。また、3日間の活動の内、1日だけ体力班のボランティアもさせていただきました。ボランティアに行って特に思ったことはテレビで見たものと実際に見たものは違うということです。テレビで見た場所も実際に行ってみると何か違うなと感じました。メディアで報道されていることもほんの一部にすぎません。活動中、現地の方々に直接お話を聞く機会もありました。当時の話をすることは辛い気持ちもあったと思いますが、あったことをそのまま私達に伝えてくれたことに感謝しています。現地の人によるとがれきの撤去を県だけで行うには100年以上かかるそうです。3日間でやれることは本当に少なかったけれど、ほんの少しでも力になればいいなと思います。そして、ひとりでも多くの人に自分の目で現状を見て、感じてほしいと思いました。



気仙沼市での海岸清掃活動



仮設住宅の自治会長さんと気仙沼のボランティアセンターの方々

2. 引率者レポート

兼岡秀俊（医学部看護学科教授）

少し涼しい東北で、明るく元気に活動する学生さんを支えたい、そんな気持ちで参加しました。木々の明るい緑、遠くに広がる青い海、あつという間の南三陸町でした。現地に着くと、血の気がすーっと退きました。報道で見慣れたはずの被災地。けれど、町の入り口から町の向こうの外れまでがぼーんと見えてしまう。電柱、電線、水道管、道路がむき出しに整備された硬い空間。強いショックに言葉が出ません。翌朝から、体力班は九州と変わらない猛暑の中、汗を拭い歯を食いしばってがれきを片付けました。声を掛け合い、何人かの笑顔に助けられ、埋もれたコンクリートと格闘しました。日陰の無い中、昼休みはバスの中で眠りこける。遅い夕飯、グループ別ミーティング、入浴を終えて11時には深い深い眠り。朝6時半出発。朝食はバスの中でおにぎり。2日、3日と続きました。リーダーの下、みんなそれぞれが力を出し切り、本当によく頑張った。医師の私が一番驚いたことは、あの炎天下、一人の熱中症者も出なかったこと。篤い志と漲る力、溢れる真情は、福大生ならばこそ。これら学生諸君を長く誇りに思います。

岩永和代（医学部看護学科講師）

南三陸町の津波被害地域でのがれきの分別作業に参加させていただきました。活動した3日間は晴天で、日差しを遮るものはなく、気温は35度以上だったと思います。約50名の体力系活動班は、ジャージ、軍手、帽子、マスクという完全防備で、脱水防止のために水分を補給しながら活動しました。汗は滝のように流れ、帽子からはみ出していた耳たぶには日焼けによる水疱ができてしまった学生さんもいました。前もって気づいてあげられず申し訳なかったです。しかし、皆な声を出しながら澁刺と活動しており、素晴らしかったです。発災から1年半が経過し、大きながれきは片付けられていましたが、復興にはまだまだ時間がかかるように感じました。今、私達にできる活動を行っていくことの重要性を感じました。

田中英彦（理学部化学科兼任講師）

震災直後、「絆」という言葉が世の中に溢れていたが、1年9ヶ月が過ぎた今、「絆」を口にする人はほとんどいない。被災者は忘れられた存在に成りつつあることに悲しみと深い失望を感じているようだ。

8月の炎天下の中で、学生諸君と共に南三陸町の被災地の片付けに汗を流した。「きつい」「汚い」「危険」の3Kの作業環境の中で、学生諸君のがんばりと明るさを大変誇らしく思った。さらに、事前研修や片付け作業、また、地元の人達との交流を通して、学生諸君がお互いを労り合い「絆」が深まっていく様子は、とても感動的であった。

今回ボランティアへ行って被災地の人々と築いた「絆」は細く弱いものであるが、被災地との関係と関心とを持ち続け、太く強い絆を築いていきたいと思う。

篠崎 博（学生課長）

今回、私は宮城県の南三陸町志津川漁港付近の本浜地区で、8月21日から3日間住宅のがれきの分別作業を行った。活動中の2日目に南三陸町ボランティアセンターで手伝っている東京からの方と話す機会があり、われわれの作業が何故必要かを聞き、納得し、ボランティア活動に対する意欲がわいた。その方はすでに3ヶ月間ボランティアをしているとのことであった。また帰り際には、昨年3月に本学を卒業した男性が4月からボランティア活動を行っており、われわれがボランティアに来ていることを聞きつけ、ホテルを出発する際、見送りにきてくれた。いろいろな形でボランティア活動を行っている人々がいることに驚くとともに素晴らしいことだと思った。

古賀 龍（学生課員）

私は今回の運営担当者として、隊員募集・事前準備から携わってきました。昨年度の第1次派遣隊の成果があったとはいえ、心のどこかでたった5日間でどれだけのことができるのだろうか、不安であり、無力感も感じていました。さらに活動が始まり、被災地の現状を見るとその気持ちはさらに大きくなりました。しかし、8月22日に表敬訪問をした南三陸町の佐藤仁町長から「これは若い人への投資ですよ」というお言葉をいただき、その気持ちは吹き飛びました。東北から遠く離れた九州に住む隊員達が実際に被災地を訪れ、現地の方々と交流して想いを直に感じ、炎天下のなか倒れそうになりながら必死に作業したことは本当に得難く貴重な経験となりました。期間中および帰福後の隊員達の成長を見ていると、きっと将来、この経験を基に被災地を含め社会全体に大きな貢献をしてくれる人材が多数輩出されると確信しています。短い期間の僅かな貢献ではありましたがこの「投資」がいつか大きな実を結ぶことを楽しみにしています。

上原洋平（広報課員）

学生と共に訪れた気仙沼市と南三陸町。

取材で被災地の移動を繰り返した。現地の方も驚くほど暑い1週間のある日のこと―

「この水を学生さん達に飲ませてあげてください」

移動で私がお世話になったタクシー運転手の方が、わざわざ10リットル以上もの水を抱えて持ってこられた。その方の暮らす環境を思うと、今でも感謝の念に絶えない。

現地の方々を取材・撮影する中で、復興までの道のりが長いことを肌身で感じたが、それと同時に少しずつ、着実に復興に向かっていることも知った。今回の派遣隊で、学生だけでなく私自身も人としての成長の糧を得ることができた。これからの被災地の復興を祈り、そして人として成長し、再び被災地を訪れたい。

西村愛子（言語教育研究センター事務室員）

今回の活動の場所は、馬籠小学校の学童保育のお手伝いで、特別に支援とか、ボランティアといったような雰囲気ではなく、通常の学童保育の補助として受け入れていただいた。

そこには、すでにとりもどされた日常の生活があり、子供達は福岡からやってきた大学生のお兄さんお姉さんと、たわいのない話をしたり、勉強をしたり、遊んだり、本当に普通の3日間を、けれど、いつもより少しだけ特別な3日間を過ごした。

そこで先生からいただいた言葉。

「人を癒してくれるのはお金やモノではなく、やっぱり‘人’なんです。」

今回、私達がしてきたことは、ここ福岡でもできるような子供達と一緒に遊ぶ、同じ時間を過ごす、という本当に普通の日常のこと。けれども、その、「日常の出来事」の中で、子供達が少しだけいつもより、楽しんで喜んで、その喜ぶ姿を先生方がみて嬉しいと思う、そんな小さな感動が明日頑張れる力となるんです、と教えていただいた。

最後に先生方に「福岡に帰って何と伝えたらよいですか。」とたずねたら、「みんながんばってたよ。」と伝えてほしいとおっしゃられた。

みんな、いろんなことを胸にしまって、それでも前を向いてがんばっている。そのがんばる力へのお手伝いの一つの形を教えてもらった5日間であった。

古賀隆次（福岡大学病院医事課員）

私は被災地に行くまで、今回の震災をどこか人ごとのように感じている部分がありました。しかし、被災地を目の当たりにすることで、震災の恐ろしさ、そして私の当たり前の日常のありがたさを学び、「他人事」から「自分事」へ思いが変わりました。それは、私だけでなく学生達も同様で、それぞれに何かを感じて活動しているのが分かりました。

私達がした活動は全体からすると本当に小さな活動に過ぎません。しかし、その小さな活動の積み重ねが復興へ繋がるのだと今回の経験を通じて感じました。だからこそ、今回のボランティアに参加して良かったと終わらせるのではなく、今後も継続して支援を行うことが今回参加した者としての使命だと感じています。

田代美由紀（福岡大学筑紫病院看護師）

私は、この5日間で実際に観て、触れて、感じることで、災害の恐ろしさを改めて実感することができました。同時に、今自分が何気なく生活している日々、仕事や家族に囲まれ生きていることが、どれだけ幸福なことなのかを考えさせられました。被災者の方々の「ふるさと」に対する想いはとても強く、その想いは被災者の絆をより深く繋ぎ、復興に取り組んでいる姿には胸を打たれました。「この経験を、風化させてはいけない。伝えていくことが、私達残された者の宿命だと思い日々を生きています」という被災地の方の想いと同じく、私も、この活動で感じたこと、経験を多くの人に伝えていきたいと思っています。

5 活動でお世話になった方々からのメッセージ

佐藤仁 様（宮城県南三陸町長）

「只ひたすらに、感謝…」

昨年3月11日に発生した東日本大震災から、早や1年9ヶ月が経ちました。大津波は、町の人々の生業や生活を押し流し、かつての街並みは、その面影をとどめていません。

しかし、私達は、悲嘆に暮れているばかりではありません。福岡大学の皆さんをはじめとした多くの方々の心からの激励やご支援に応えるためにも、前を向き、明日を信じ、未知なる挑戦となるこの町の復興に専心しなければならないと思っています。

自らの意思で、被災者を支援する活動を行うということは、誰にでもできることではありません。

この尊い活動は、必ずや、今後の皆さんの人生の「糧」となるものと信じております。

大津波の爪痕は、皆さんがその目でご覧になったとおりです。福岡大学の学生さんには、どうか、今回の震災を多くの方々に伝えることで、決して風化させないような取組を行っていただけたらと思っています。今後も機会を見つけて南三陸町においでください。ありがとうございました。

工藤祐允 様（上山八幡宮宮司）、工藤真弓 様（上山八幡宮禰宜）

先日は遠い福岡から大勢で南三陸町にお越し下さいまして、ほんとうにありがとうございました。列をなして参道を進み、お宮で拝む皆さんは、綺麗な氣を纏っていました。100名以上の皆さんの氣が揃っていて、それは「思いはひとつ」ということを物語っているようでした。

天災は哀しみと同時に多くの気づきを私達に与えましたが、そこから立ち上がることが出来たのも、皆さんのように応援してくださる方々の存在を常に身近に感じていたからです。涙してくださる方がいたからです。

深い祈りによって、私達は今日まで救われ生きてきました。

私の家は神社を生業としていますが、この震災で「祈り」というものの本質を、皆さんから教えていただきました。成し遂げようとする、そのことに、祈りが含まれているか、どこまで祈りを持って向かっているかによって、物事はゆるやかに変わってゆきます。祈りがそこにあればこそ、叶うこともあるのだと、この一年半、幾度も実感しました。

それは欲望を叶える力とも違います。

皆さんが南三陸をはじめ、被災した土地の上で流してくださった、汗や涙のような、無欲の思いにこそ、永遠の力は宿るのだと思います。

皆さんの尊い命の鼓動は、今、南三陸町の蘇る力となって、確かに深く響き渡っています。

猪又隆弘 様（南三陸町災害ボランティアセンター・センター長）

先日は、南三陸町復興のためのボランティア支援活動にご参加いただき、ありがとうございました。

ボランティアセンター開設から延べ9万人（2012年10月末）のボランティアの皆さんの力が結集して、がれき撤去などの活動をしていただいた結果、旧市街地のがれきは姿を消し、復興のための嵩上げの実施と住宅の高台移転への道筋が見えてきました。広大な被災地の中で、一人ひとりの作業範囲は狭く「自分には何ができたのだろうか。役に立てたのだろうか」と疑問を持つ人は少なくありません。しかし、これだけは言えます。今回参加いただいた皆さんも、9万人の中の一人です。一人ひとりの小さな力を繋いできたからこそ、南三陸町が復興へ向かいつつある、ということです。その一人ひとりの活動の繋がりこそが「絆」なのだろうと思います。

被災者の皆さんは、黙々と作業されるボランティアの皆さんの背中から、明日への活力を、希望をいただきました。復興へは、まだまだ遠く、その道程も見えてきていない現状があります。そのため、被災地ではまだまだ多くの支援を必要としています。日本全体で見た時に、津波による被災の記憶が風化しつつあることもまた事実です。今回ご参加いただいた皆さんや、後に続かれる皆さんには、ぜひとも被災地で見たこと、感じたこと、聞いたことを語り継いでいただき、今後の支援活動に活かしていただければと思います。

今後とも、南三陸町へのご支援の程を、何卒よろしくお願いいたします。

熊谷知乃 様（元 気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター〔復興支援センター〕職員）

ありがたいことに気仙沼には多くの学校、団体からの支援の申し出があり、可能な限り応じることができるよう橋渡しをさせていただきました。

残念ながら、ボランティアの方々の中には「わざわざ来てやってる」と言われる方、住民の方の負担を考えずに広告の作成などを依頼される方もいました。そのような場合に社協として調節が難しい場面がありました。福岡大学のみなさんには仮設住宅や学童でのレクリエーション、がれきの撤去など、社協の調節を快く受け入れて幅広く活動していただきました。本当に感謝しています。今度は復興した気仙沼までいらしてください。住民一人ひとりが感謝の気持ちを持ってお迎えいたします。心よりお待ちしております。

管野勝美 様（気仙沼市立面瀬小学校区学童保育なかよしハウス）

炎天下の中、汗を流しながら遊んでくれた福岡大学の皆さん、3日間本当にありがとうございました。ふざけ合い、笑い転げ、膝に甘えた楽しい時間は今も子供達の記憶に鮮やかです。相変わらず外遊びが好きで元気一杯に過ごしていますが、地震の度に「津波くる？」と怯えた表情もみせます。いずれこの子達も震災を乗り越え、自分の足で歩いていかなければなりません。皆さんが見せてくれた優しさや温かさを力にしていくことでしょうか。私達も皆さんの真剣な思いを子供達の成長に繋げたいと頑張っています。今回、風化させまいと活動している様子を読ませていただき嬉しく温かい気持ちになりました。子育ては手をかけ、目をかけ、心をかけと言いますが、立ち上がろうと頑張っている被災地をどうぞ応援し続けて下さい。気仙沼からも皆さんのご活躍をお祈りしています。

野村祐子 様（大谷学童保育みつばちクラブ）

東日本災害ボランティア第2次福岡大学派遣隊の皆さん、その後いかがお過ごしでしょうか。

私達大谷学童保育「みつばちクラブ」は、震災前は小学校近くの地域福祉センターで行っていましたが、津波被害により施設は使用できなくなり、大谷公民館の一室を間借りしての保育を震災後7月から再開することができました。

今回、福岡大学派遣隊の皆さんが遠く福岡から学童保育の子供達との交流支援に来ていただけることになったにもかかわらず、部屋のスペース的なことから人数を制限することになってしまいました。しかし、引率された先生をはじめ学生の皆さんは一所懸命子供達と関わってくれました。猛暑の中、プールや小学校での学習活動に積極的に子供達を引率し、汗だくになりながら笑顔いっぱい接してくれました。お兄さんお姉さんと一緒に遊んでもらったこと、自分の話を聞いてもらえたことが子供達にとって嬉しかったと思います。3日間という短い期間でしたが、私達職員の動きを見て気かけ、生活の中で今何をすべきか考えみんなをまとめてくれたリーダー、暑さの中、公民館玄関前で学童保育以外の子供達にも声をかけ一緒に遊んでくれた先生、大好きな音楽で子供達との出会いの歌を即興でギター片手に弾き語りしてくれたお兄さん・・・一所懸命な姿や被災地を思う篤い気持ちに感激しました。

先日、送っていただいた福岡大学「学園通信」に、この夏一緒に過ごした先生、お兄さんお姉さんの姿を探しては「いた！」と懐かしく思い出していた子供達です。この子供達が笑顔でいられるようお願い、そして、遠い福岡の地で時々には気仙沼で過ごした日々を思い出してもらえたら嬉しいです。貴重な学生生活が充実したものとなるよう、これからのご活躍をお祈りしています。ありがとうございました。

及川たい子 様（馬籠幼稚園園長）、鈴木公子 様（馬籠幼稚園学童担当）

平成24年8月21日（火）から23日（木）の3日間、福岡大学の学生さんに学童保育のご支援をいただきました。この大震災を受け、学生さん達が自ら進んで支援を申し出てくれたと聴いて感銘を受けました。

被災地域に支援を申し出てくれた学生さんとあり、学童保育に来て子供達と共に遊んだり話し相手になったり、また子供達の宿題や勉強をみてくれました。学童保育の子供達は元気一杯のお兄さん・お姉さんと一緒に懸命に勉強に取り組み、子供達の様子や状況に合わせて丁寧にやってくれたので、普段はなかなか長続きしない子も真剣に取り組んでいたことが印象的でした。一人一人に真剣に向き合ってくれた学生さんに感心させられました。また夏の暑い最中に園庭の草取りや掃除をしていただき2学期の環境整備が整い、お陰さまでスムーズな2学期を迎えることができました。

人生順調にいくことばかりではなく、今回のように災害があり地域をあげて取り組まなければならないこともあります。このようなときに、普段の自分の生活や生き方が現れます。特に人とのかわりは普段からよりよく前向きにかかわっていくことが大切と思われれます。自分の出来ることは率先してやること、人が困っているときは見てみぬふりをしないこと、なにごとにも根気よく取り組み、物事は最後まですることは大切です。失敗をすることもあることでしょう。その時は謙虚に自分のことを振り返り、何がいけなかったのかを検証し、次の仕事や物事に活かし、同じ失敗を繰り返さないことが大事だと思います。

“若いときの苦勞は買ってでもしろ”と言われていますが、若いときの様々な経験は歳をとっていくうちに必ず現れてくるものです。年老いてから良く現れるのは、それは若いときこつこつと積み重ねて

きた努力の現われであるといっても、過言ではないと思います。

今回支援を申し出てくれた学生さんは、被災した地域を自分の目で見て自分の力でかかわり自分の中でいろいろ感じ学び得たことがあると思います。これからも前向きな姿勢を忘れずに立派な社会人になりますよう期待申し上げます。

ご支援をいただいた多くの学生の皆様、職員の皆様、本当にありがとうございました。

6 未来へつなぐ

今回の活動を終えた後、被災地やボランティア活動への思いを絶やさぬため、スローガンである「未来へつなぐ」のテーマに沿ってそれぞれが様々な形で活動を行っています。その活動の一部を報告します。



原口 茜（商学部商学科第二部）

八女災害ボランティア活動

この夏、九州北部でも豪雨災害にみまわれ、熊本県、大分県、福岡県の多くの方々に甚大な被害が発生しました。そこで私達は被災された方々を支援するために東北から帰福して1ヶ月後の9月30日に30名もの派遣隊学友と一緒に、被害が大きかった福岡県八女市黒木町笠原地区にボランティアに行きました。

活動としては、茶畑の再開にむけての土砂撤去作業、きのこ村キャンプ場のがれき撤去などを手伝ってきました。九州を襲った集中豪雨での被害は私達の想像以上で、改めて自然災害の恐ろしさを感じました。そして、災害ボランティアのニーズは私達の住む福岡にもあることを知り、困っていたり不自由になっている方がたくさんいることを知りました。本当に大切なことは活動を長く続けることです。言葉や口だけではなく、これからもボランティアに体を動かして関わり続けていくことが大事だと思います。

また、今回の活動のために隊員から集めたお金の残金6,563円を全額、笠原復興基金に募金させていただきました。八女のボランティアに参加していただいた派遣隊の学友にこの場を借りて改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

主な活動：農地の復旧作業・地域の農家の手伝い・その他、地域復興に役立つお祭りの参加など
お世話になった団体：山村塾 事務局 小森耕太さま



大川内 文哉 (スポーツ科学部スポーツ科学科)

福岡大学派遣隊としての活動が終わったものの、このまま終わらせたくない、そういった思いが我々にはありました。東北でボランティアをしたいという同じ志をもった人が100名以上も集まったのだから、再び結束すればきっと大きなことができると考え、派遣隊に参加した数名を中心にボランティアサークルを立ち上げました。活動としては、やりたいことをやろうという考えの下、一人一人が案を出し、主役になることで、様々な視点から今の社会に必要とされていることを積極的に取り組んでいこうと考えています。また、派遣隊の活動を通して人との繋がり大切さを学んだため、ボランティアをしていく中で多くの人脈を増やしていくことも活動の一つです。

ボランティアと聞くと、堅いというイメージがあり興味があってもなかなか実行できない方がいると思います。我々は、そういったイメージを払拭し、ボランティア精神をもった方であれば誰でも参加できるサークルを目指しています。

現在、男子21名、女子16名の計37名のメンバーがいます。メンバーは、1～4年生、学部学科も様々であり、明るくお互いの個性を認め合える仲です。時期は問わず、いつでも参加者を募集しております。興味がある方は、big-fumi.112@isoftbank.jpまでご連絡ください。こちらは、我がサークルの幹事のアドレスとなっております。また、Facebookの方にもページがございますので、「Crazy Favors」と検索してみてください。皆様のご参加お待ちしております。

西村 瑠美 (医学部医学科)

私は派遣から帰った後、学生主催による講演会を開いた。会のテーマは3.11とは異なるものだが、学生が他者へ自分の活動や考えを伝えるという会となり、学生自身がアクションを起こし、次につなげていくものとなればと考えている。

私の所属する愛好会、福岡大学医学部社会医学研究会では、2012年11月17日、「第一回福岡大学社会医学研究会」を開催した。この会の趣旨は、医療系の学生を中心として、学生が普段行っている活動(ボ

ランティア活動など)や、終末期医療などの医療の問題に対する考えを発表してもらおうというものだった。医学生10名(他大学1名、福大9名)、社会福祉士(1年目)1名、医師1名に発表をしていただいた。

内容は、多様な性の問題、1型糖尿病の小児に対するボランティア、学生に対するBLSワークショップ(Basic Life Support:心肺蘇生法等)、積極的安楽死、尊厳死、終末期医療に関する人々へのインタビュー、新人社会福祉士が現場で感じること、「自殺予防」の観点から精神科による救急医療へのアプローチなど、多岐にわたった。

総勢54名の参加者に恵まれ、学生の考えを伝える有意義な時間をもった。今後もこのような会の開催を続けていく予定である。

福重 達也(経済学部経済学科)

私は福岡大学第1次派遣隊として、東北へボランティアに行きました。その時に会った老夫婦に「遠いところからありがとう。でも自分のまち(福岡)でも対策はしなさいね。」と言われたことが今でも忘れられません。また今回の震災で多くの大学生が活躍し、そのパワーを自分達のまちで活かすことができれば、地域全体で防災力の向上が期待できるのではないかと思います。

この言葉や思いがきっかけで、2012年度の学生チャレンジプロジェクト「福大生のための防災対策～福大から地域へ広めよう～」を行うことに決めました。活動の概要としては、福大生の防災意識の調査や福岡大学と周辺地域の防災対策についてヒアリングを行い、リーフレットを作成したことです。そして活動の集大成として東北と関西から講師の方をお招きし、地域住民の方も含め防災意識向上のためのワークショップ「伝えよう!～3.11から学び、福岡でできること～」を昨年12月1日に開催しました。

活動を通して、私達大学生の力=若い力は地域に求められていることがわかりました。いざというときに、大学生と地域が協力し合えば必ず大きな力を発揮できるでしょう。そのためにも日頃から関係をつくっておくこと、お互いが顔見知りになっておくことが大切であり、それが「大学生を交えた地域防災」へとつながっていくと思います。今後はどのように関わっていくかさらに考えていく必要があります。

東日本大震災から2年が経とうとしています。今後の大きな課題として、私達自身のまちの「防災」、大学生と地域が協力した「防災」があげられるのではないのでしょうか。

7 学内募金活動報告

募金活動をするきっかけとなったのは隊員の中から、東北にボランティアに行く前に福岡の地でできることはないか、という声が上がったことからだ。リーダー達の間で「私達に福岡でできることは何か」と考えた結果、昨年の第1次派遣隊を参考にしながら、募金活動を行うことに決まった。

始めは、学外で募金活動を行おうという意見もあった。しかし、私達は福岡大学の代表として活動を行うため、福岡大学の学友にボランティアに協力してもらおう、そして、私達が代表として東北にボランティアに行くことを学友のみんな知ってもらおう、ということで、学内で活動することとなった。

みんなで募金箱作成や、ビラを作成し、7月20日～23日、8月1日の4日間、募金活動を行った。少ない期間ではあったが、たくさんの学友、教職員の方の協力を得て、70,432円の募金が集まった。そして私達の集めた募金と、昨年の第1次派遣隊および学生課設置募金箱、学友会各部からの寄付等により、304,321円の義援金が集まった。

この義援金の38,961円を仮説住宅における高齢者の方との交流会で行ううちわ作りの材料費、お茶会の費用等、その他第2次派遣隊の活動費として使用した。

残額の265,360円は活動を終え、帰福後の協議の結果、第1派遣隊と第2次派遣隊がボランティア活動を行うにあたり受け入れていただいた、宮城県南三陸町・気仙沼市・石巻市・岩手県陸前高田市の4カ所のボランティアセンターに義援金として1カ所あたり65,500円を10月17日に寄付した。私達は、募金活動を通して、たくさんの方に協力してもらい、たくさんの温かい言葉を頂いた。そのことは隊員にとって、第2次派遣隊として研修を続けていくうえでも、現地で活動するうえでも、とても大きな力となった。さらに福岡大学の代表としてボランティアに行くことを隊員皆が再認識し、責任感がより強くなった。昨年の第1次派遣隊ならびに第2次派遣隊の募金活動に協力、賛同していただいた、学友、教職員の方々に深くお礼を申し上げます。隊員、学友、みんなの想いを託した義援金が、現地の方々に少しでも役に立ち、そして復興に繋がることを願いここに報告します。

東日本災害ボランティア第2次福岡大学派遣隊

全体リーダー 本村 麻菜美、小林 拓海

学内募金担当者 尾関 直人



学内での募金活動

【派遣隊にご支援、ご協力いただいた方々】

宮城県南三陸町長 佐藤仁様

宮城県南三陸町役場の皆様

宮城県南三陸町 上山八幡宮 宮司 工藤祐允様、禰宜 工藤真弓様

宮城県南三陸町災害ボランティアセンターの皆様

一般社団法人南三陸町復興推進ネットワークの皆様

宮城県南三陸町切曾木（西戸）仮設住宅の皆様

宮城県気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンターの皆様

宮城県気仙沼市立面瀬小学校校長 長田勝一様および先生方

宮城県気仙沼市立面瀬小学校学区学童保育なかよしクラブの先生方および子供達

宮城県気仙沼市立大谷小学校学童保育みつばちクラブの先生方および子供達

宮城県気仙沼市立馬籠小学校学童保育パンダクラブの先生方および子供達

宮城県気仙沼市南最知住宅北の皆様

宮城県気仙沼市南最知住宅南（西）の皆様

宮城県気仙沼市条南中学校住宅の皆様

災害支援ボランティア「チーム夢」代表 吉水恵介様

東日本大震災被災者支援ふくおか市民ネットワーク 代表 飯田真一様

宮城県南三陸町 ホテル観洋様

南三陸観光バス株式会社の皆様

株式会社JTB九州 事業開発チーム 営業担当課長 山田育照様

ダイイチユニカ株式会社の皆様

株式会社エフ・ユー・プロテクション様

福岡大学関係

人文学部教育臨床・心理学科 教授 林幹夫様

75年史編纂室、福岡大学病院および筑紫病院関係各位

理学部地球圏科学科 教授 杵山哲男様（第1次派遣隊隊長）

および東日本災害ボランティア第1次福岡大学派遣隊引率者・隊員各位

※この他多くの方々のご協力を頂きました。謹んでお礼申し上げます。

謝 辞

本報告書は、東日本災害ボランティア「第2次福岡大学派遣隊」の活動報告をまとめたものです。

この報告書は派遣隊隊員および活動中にご支援いただいた多くの関係者からのご寄稿によって完成しました。編集作業は全体リーダー、グループリーダーを中心に行いました。

昨年に引き続き、福岡大学では112名のボランティアを派遣しましたが、被災地におけるボランティアのニーズは刻々と変化し、多様化しています。そのような中、限られた時間と力を最大限活かすために、隊員が一丸となって準備を行いました。特に昨年度叶わなかった、プログラム系（交流や心のケアなど）のボランティアを実現するために担当の学生を中心に精力的に活動を行いました。体力系ボランティアについても記録的な猛暑の中、脱落する者もほぼなく、力の限り作業を行いました。

被災地の復興の力になりたい、住民の皆さんを元気にしたい、隊員全員がそんな気持ちで臨みましたが、現地の皆さんと交流する中で、悲しみを乗り越え前に進もうとされている多くの方々の姿を見て、元気をもらったのは我々隊員のほうでした。

昨年同様、約100名以上の大所帯となり、受入れ先のボランティアセンター様や各施設の皆様にはご無理やこちらの思いばかりを申しあげる場面もあり、大変ご迷惑をお掛けいたしました。また準備から活動期間中、派遣後まで、学内外の多くの方々にお忙しい中ご協力いただきました。心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、東日本大震災によりお亡くなりになられた多くの方々のご冥福と一日も早い被災地の復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

東日本災害ボランティア「第2次福岡大学派遣隊」一同

平成24年度 東日本災害ボランティア
「第2次福岡大学派遣隊」活動報告書

平成25年3月 発行

発行 福岡大学学生部学生課
福岡市城南区七隈八丁目19番1号
TEL 092-871-6631 FAX 092-873-2981

編集 山口武夫、篠崎 博、古賀 龍、上原洋平、
本村麻菜美、小林拓海、蔭 明樹、松枝美華、上野紗季、
乾 旭秀、原口 茜、原田大輔、市川泰子、
矢野雅貴、岩崎有也、古嶋研史、久保敦子、
尾関直人、中野加奈子
